

主の回復における 現在の騒動を対処する道

編集者註：以下の文章は、2006年10月5日から7日まで、カナダのウィスラーで開かれた長老と責任者のための国際的訓練の参加者に用意されたものであり、ウイットネス・リー兄弟の務めの出版物からの抜粋です。

主の回復における現在の騒動と今日の主の動きの方向
からの抜粋：

神の子供たちの中の騒動

今、わたしは旧約と新約の両方における神の子供たちの中の騒動をあなたがたに指摘したいと思います。

旧約のイスラエルの子たちの中の騒動は
民数記に記録されているとおりである

イスラエルの子たちは、幕屋の建造と神を礼拝する奉仕にあずかる祭司職の設立を通して、一つの国に形成された直後、すなわち彼らの神政政治が設立された後、荒野の旅を始めました（民 10:12-13）。わずか三日の後（33 節）、彼らはタベラで最初の騒動に遭遇しました。その所でイスラエルの子たちは、災難に遭っている者のようにつぶやいていました（11:1-3）。このつぶやきの後、多くの入り混じった群衆は、肉が食べたいという激しい欲望にかられました（4 節）。その後、モーセがクシの女をめとったので、モーセの姉と兄であるミリアムとアロンは、モーセを非難し反逆しました（12:1-15）。彼らの反逆のゆえに、ミリアムはらい病になりました。このらい病が広がらないように、七日の間ミリアムは隔離されなければなりません。この騒動の後まもなく、彼らはパランに宿営しましたが（12:16）、そこで不信仰の問題が起こります。この時、イスラエルの子たちは大声を上げて泣き叫び、良い地に入ることにつぶやきました。彼らは、もし良い地に入るなら、巨人の餌食になると思ったのです（13:32-33、14:3）。彼らはエジプトに引き返そうとさえ願いました（14:4）。彼らはエジプトで苦しんだ虐待と奴隷状態を忘れてしまったのです。

民数記第 15 章は非常に平和に満ちた章です。ここには何も騒動の記録がありません。しかし第 16 章では、コラとダタンとアビラムが会衆の指導者二百五十人と共に立ち上がって、モーセに反逆しました（1-3 節）。これは重大な騒動でした。第 15 章の平和はあまり長く続きませんでした。この反逆に先立って、指導者たちの間である程度の発酵が起こっていたのです。この反逆の刑罰は三重でした。まず神は地を開いて 3 人の指導者とその家族を飲み込ませました（民 16:32）。こうして体と魂と霊をもって生きたままシェオール [陰府] へと下りましたが、このことでは彼らが歴史の中で最初の人たちです（33 節）。第二に、エホバから火が出て、二百五十人の指導者たちを焼き尽くしました（35 節）。このようにして焼くことは神ご自身によってのみ成し遂げることができました。第三に、疫病が臨んで、一日に一万四千七百人を殺しました（46-49 節）。この三重の刑罰に続いて、

神は氏族ごとに杖を一本ずつ持ってくるように命じられました。また神はそれらを証しの箱の前に置くようにモーセに命じられました(17:1-5)。芽を出した杖の人が神の選んだ人です。次の日、アロンの杖は芽を出しただけでなく、アーモンドの実を結んでいました(8節)。これは復活の奇跡でした。それにもかかわらず、この復活の奇跡を伴う三重の刑罰でさえ、反逆の民を征服することはできませんでした(12-13節)。

民数記で続く章の内容は騒動に次ぐ騒動、問題に次ぐ問題です。主はモーセを地上で最も柔和な人であると証しされました(12:3)。しかし、このようなモーセのような人が怒って、イスラエルの子たちに向かって逆らう者と呼ばせた(20:10)のも不思議ではありません。モーセが怒った理由を理解できるとはいえ、怒りから出たイスラエルの子たちに対する彼の言葉と態度は神を不愉快にさせました。主がアロンとモーセに語られたとき、主は彼ら二人が神の言葉に逆らったと言われました(24節)。この失敗のゆえに、モーセとアロンは良い地に入ることができなくなったのです。何という悲劇でしょう！

民数記における最後の大きな騒動と失敗は、バラクの悪巧みを伴うバラムの教えのわなによって(31:16)、イスラエルの子たちが淫行と偶像礼拝を行なった時に起こりました(25:1-3)。この失敗のゆえに、二万四千人が疫病によって死にました(25:9)。この失敗の後、神は来て、民数記第26章でイスラエルの子たちの数を再び数えさせました。40年という浄化し、きよめ、ろ過する年月の後、二回目に数えた時は、六十万千七百三十人でした。この数は最初に数えた時より千八百二十人少なかっただけです。最初に数えたのと二回目に数えた時との大きな違いは、二回目に数えられた人たちが全く新しくなったということです。モーセはイスラエルの子たちの数を再び数えるのを助けましたが、彼は二回目の数に入っていないでした。最初に数えられた人たちのうち再び数えられたのは、ヨシユアとカレブだけでした。民数記第26章までに、神は新しい民を得られました。彼らは神聖な取り扱いを通して神の裁きによって浄化されてきた民でした。ですから彼らはきよめられたのです。これが旧約の歴史です。荒野における騒動のすべてを通して、イスラエルの子たちは完全に浄化され、きよめられ、ろ過されました。

新約の主の民の間の騒動

新約において主イエスは十二弟子を選んで、彼らを使徒として立てられました(ルカ6:13)。主イエスによって選ばれた弟子の一人はユダでしたが、彼は裏切り者となりました(16節)。使徒パウロの生きている間、召会生活は問題に満ちた騒動を経過しました。

わたしは1932年以来、召会生活をしてきました。そして十八年間、わたしは二一兄弟と共にいました。二一兄弟と共にいたその十八年間に、五年か六年ごとに騒動がありました。1949年に、わたしは台湾に行きました。1949年から1989年まで現在のも含めて三つの大きな騒動がありました。騒動が起こる頻度は五年か六年ごとに一度でしたが、十二年ごとに一度にまで減少しました。

騒動は前進する召会、旅をする召会の定めです。団体の旅をする召会がこの地上で旅をしている間、騒動を経験することは定められています。わたしたちがきよめられるためには、このような騒動が必要です。わたしたちの見方によれば、騒動はあまり良くありませんが、実際には騒動が必要なのです。ですから、わたしたちは召会生活で何の騒動も全くなくなるのを期待するべきではありません。使徒行伝第20章で、パウロはエペソに在る

召会の長老たちと長く語った後、彼らに警告して、彼らの間に凶暴なおおかみどもが入って来て、群れを容赦しないであろうと言いました(29節)。30節でパウロは彼ら自身の間から、曲がった事柄を語って、弟子たちを引き離し、自分に従わせようとする者が起こると言いました。過去三年のうちに、ある者たちがわたしたちの間で起こって、曲がった事柄を語ってきました。

「言葉と証し(The Word and the Testimony)」という定期刊行物の中で「実際的であること(Being Realistic)」という記事が出版されました。この記事の著者はジョン・ソーであり、その定期刊行物の編集者はジョン・インガルスとビル・マロンです。この記事で、わたしが、第二次世界大戦でフィリピンを侵略し、占領した時の日本軍のようであると暗示しています。これはわたしがアナハイムに在る召会を侵略し、それを取り、それを占有して「ウイトネス・リーの召会」にしたことを暗示しています。さらに進んでいくと、その記事は、アナハイムにあるボールロードの集会は立場を失ったので、もはや地方召会ではないことを示します。この記事によれば、アナハイムに在る召会の立場は、一人の人(ウイトネス・リー)と彼の働きと務めのものとなり、ちょうどエルサレムの宮の敷地がイスラム教によって占有されているように、それは今わたしたちによって占有されていると言うのです。これは曲がった言葉ではないでしょうか？

この記事の別の個所、「ニコライの者たち」という表題の下で、わたしは一人のニコライの者として暗示的にそこに分類されています。また暗示的に、わたしは金を儲けるため神の言葉を売り歩くパラムにたとえられています。

ジョン・ソーによるこの記事でもわたしをイゼベルにたとえています。イゼベルは女預言者と自称し、すべての神の預言者たちを殺し、自分を神の唯一の託宣者としました。これは使徒行伝第20章30節を成就する曲がった言葉ではないでしょうか？

主の回復における現在の騒動

わたしたちの間にある現在の騒動は反逆であり、陰謀を伴った反逆と考えられます。わたしは2年間以上も静かにしていました。あなたがたはこの事柄についてわたしが語るのを決して聞いたことがないでしょう。時折、わたしは長老たちの集会でこの事柄に関して何か言いましたが、明らかにしていません。この反逆を開始した人たちが印刷物によってすべてを明白にした以上、わたしは長い沈黙の期間を保った今、あなたがたに幾つかの事実をお知らせするべきであると感じます。しかし、このメッセージでは原則的なことだけを少し述べます。完全な詳細については、「現在の反逆の発酵」という本を見てください。それはリビングストリームミニストリーによって出版されており、無料です。

邪悪な者によってそそのかされた

過去二年の間に反逆によって起こった事柄を徹底的に考察した結果、わたしは一つの結論を得ました。すなわち、この反逆は悪魔、邪悪な者のしわざであるということです(マタイ 13:19)。なぜなら反逆する者がもたらした大部分のものは、論理的なものでなく、理屈に合ったものでなく、彼らが行なった方法は非人道的なものであったからです。

曲がった者たちによって遂行された

主の回復の中で現在、わたしたちが遭遇しつつあるそのような者たちの反逆の源は、邪悪な霊から出たそそのかしによるだけでなく、人の手段を通して遂行されています。エペソの長老たちに対するパウロの勧めの中で、使徒行伝第 20 章 30 節で彼ら自身の間から、曲がった事柄を語って、弟子たちを引き離し、自分に従わせようとする者たちが起こると、パウロは彼らに警告しました。過去十九世紀において、パウロの警告は繰り返し成就されてきました。わたしは、わたしたちの間の現在の反逆がパウロの警告のもう一つの成就であると言います。この反逆に加わっている者たちから出ている多くの言葉は「曲がった事柄」として考えられるべきです。

教えの風を伴って

この反逆の中で四人の指導者たちによって、特に過去三年間に出された多くの教えは、真に教えの風です（エペソ 4:14）。例えば、召会は主イエスご自身が直接（他の人たちを通してではないことを暗示している）建造されること、諸地方召会の絶対的な自治性、何の代理権威もなく、霊的な父もなく、神治主義（theocracy）ではなく民主主義（democracy）であるという教えです。これらの教えの風は、新約の正当な教えの光、すなわち使徒たちの教え（使徒 2:42）を通して助けを必要とする主の回復の親愛なる聖徒たちの何人かに損傷を与えました。

忠信な者たちに対するテスト

この非論理的で不合理な反逆は忠信な者たちに対するテストです。新約の教えを論理的に道理的に認識している聖徒、また聖なる不変の御言にしたがう主に忠信な聖徒であれば、現在の反逆の中で自由気ままな語りかけに対して興味を持ったりしないでしょう。ですから、反逆は、真に良しと認められるための忠信な者たちに対するテストです（コリント 11:19）。

回復に対するきよめ

いつも反逆が神の民の間でもたらすものはふるいにかけることです。このふるいにかけることは主の主権によって行なわれる一種のきよめと考えられ、彼の団体の民をきよめます。さらに反逆が起こるのは忠信な者たちに、彼らの意図、動機、目的、目標、他の事柄できよめを与えます。その騒動の期間、わたしは人々がわたしを誹謗中傷するのを聞いたとき、主がマタイによる福音書第 5 章 11 節で、「人々がわたしのゆえにあなたがたをそしり、迫害し、偽りを語って、あなたがたに対してあらゆる邪悪なことを言うとき、あなたがたは幸いである」と言われたように、わたしは自分が間違っているかどうかを主にチェックしていただきました。そのようなチェックを通して、わたしはきよめられました。

主の回復の中で諸問題を取り扱う正当な道

今やわたしたちは主の回復の中で諸問題を取り扱う正当な道を見る必要があります。

主の回復に対する純粹で誠実な心遣いをもって

主の回復の中で諸問題を取り扱うためには、どのような事柄にも片寄った見方がなく、

主の回復に対する純粋で誠実な心遣いを持っていなければなりません。さらにわたしたちは自己の利益、自己の企て、自己の評価、自己の考えの要素を何も持つべきではありません。わたしたちは偏見がなく、公平で、純粋であるべきです。そして、わたしたちに影響を与える何の背景もあってはなりません。わたしたちは自己の評価と自己の考えを捨て去らなければなりません。わたしたちはみな自分自身の威信を持っており、自分自身を高く評価しがります。そして他の人たちが自分を高く評価することを期待するものです。召会生活の中で自分を高く評価しようとするかぎり、わたしたちが問題となります。あるいは、わたしたちはいつも「わたし、わたしの地位、わたしの将来、わたしの権益についてはどうだろう？」と考えているかもしれません。もしこのように自分自身のことをいつも考えているなら、わたしたちは主の回復の中で問題を取り扱うことはできません。問題を取り扱うためには、純粋で、主のテストを受け、チェックされなければなりません。主の回復のために、混じりけがなく純粋で誠実な心遣いを持つとき、わたしたちは問題を取り扱う資格があります。そうでなければ、わたしたちが問題となります。

正当で共通のからだの交わりを通して

主の回復の中で諸問題を取り扱う正当な道は、正当で共通のからだの交わりを通してです。わたしたちは小さな仲間や狭い範囲の交わりでなく、共通の交わりを持つべきです。このような交わりは愛の中にあるべきです。もし愛に欠けるなら、わたしたちには資格がありません。正当で共通のからだの交わりは、個人的な小さな範囲でなく、党派的な霊がなく、隠れた内密のものではありません。これらの消極的な項目の多くは、現在の反逆の中心にいる人たちが実行しているものです。彼らは小さな個人的な仲間の中で集まって計画し、企て、たくらんだのです。彼らは数人の兄弟たちに秘密の会議を提案したのです。

使徒行伝第 15 章で指導者たちの間で開かれた正当な会議は、エルサレムで行なわれ、割礼と信仰の問題を考えました。それはパウロの時代、諸召会の間で一つの大きな問題でしたが、兄弟たちは秘密裏に行ないませんでした。そして彼らは分派を造りませんでした。パウロとバルナバは長老たちや他の使徒たちと正当な交わりをするためにエルサレムに上りました(2-21 節)。

どのような陰謀への試みをも避ける

主の回復における諸問題を取り扱うためには、どのような陰謀への試みをも避けなければなりません。物事は顔と顔を合わせて行なわれ、すべての事を光の中で保たなければなりません。物事は公に行なわれ、人に隠れて何かを行なうことを避けるべきです。陰謀の方法で人に隠れて、小さなグループで何かを行なうことは、絶対的に悪魔的であり、とても邪悪です。

わたしたちは光の子供たちとして(エペソ 5:8)、すべての事を光の中で保つべきであり、何かを暗やみの中で秘かに行なうべきではありません。わたしたちは主に仕えているのです。なぜ何かを暗やみの中で行なう必要があるのでしょうか？ わたしたちはまた同情を求めることを罪定めするべきです。今日、ある人たちは同情を求めているだけでなく、同情を捜し求めています。わたしたちは人の陰口、邪悪な語りかけ、死をまき散らすことを捨て去るべきです。陰口を言うことは残酷であり、邪悪な語りかけは中傷することです。そ

れは神の民を滅ぼす悪魔の主要な働きであり、また死をまき散らすことは死の源であるサタンと共に働いて、霊的な死の病原菌をまき散らして、神の民を殺すのです。主の回復の中で一を保つためには、これらの悪魔的なすべての邪悪を捨て去らなければなりません。

唯一の目標を固く保つ

もし主の回復の中で諸問題を取り扱おうとするなら、わたしたちは唯一の目標を固く保っていないければなりません。わたしたちのなすべきことは何であれ、聖徒たちを啓発するためであり、諸召会の益のためであり、からだの一を保つためであり、主の回復が広がるためです。これらは、わたしたちが中心路線と呼んでいる決定的に重要な点です。聖徒たちを啓発するためには自分が追い求めるものを犠牲にしなければなりません。諸召会の権益のためには、自分の利益を無視しなければなりません。キリストのからだの建造のためには個人的な好みを放棄しなければなりません。からだの一を保つためには、あらゆる種類の個人的な主張を落とさなければなりません。主の回復が広がるためには自分の区域を忘れないければなりません。このようにしてこそ、わたしたちは主の回復の唯一の目標をしっかり固く保つことができるのです。

聖書にしたがって

主の回復の中で諸問題を取り扱う道は聖書にしたがうべきです。曲解することなく、文脈を無視して解釈することなく、人間的な考えを混ぜることなく、伝統の要素もなく、開かれた追い求める霊をもって聖書にしたがうべきです。もしそのような開かれた追い求める霊を保っているなら、問題は正しく取り扱われるでしょう。聖書を曲解することを避けるためには、聖なる御言の個所を知る上で非常に客観的でなければなりません。文脈を無視して解釈することを避けるためには、主観的な知識や個人的な感覚において片寄った見方があってはなりません。人間的な考えを混ぜるのを避けるためには、わたしたちの天然の思想、天然の学識、天然の行ないを拒否しなければなりません。伝統の要素を持つことを避けるには、聖なる御言の純粋な啓示の光の下にいる必要があります。これらはすべて開かれた追い求める霊の中にわたしたちを保ちます。そのようにしてこそ、わたしたちは聖書にしたがって主の回復に関する事柄を識別し判断することができるのです。

過去における隠された分裂の要因

わたしたちの間の現在の問題は過去にその始まりを持っていましたが、その発酵する過程、あるいはパン種が膨らんでいく過程は今年（1989年）になって完全に暴露されるに至りました。今年の8月、現在の問題を主導する兄弟たちが主の回復と務めに対して公に反対する「御言と証し（The Word and the Testimony）」という名の刊行物を発行し始めました。

1984年から1986年までわたしは三つの緊急の長老たちの訓練を召集しました。最初は1984年2月、二回目は1985年9月、最後が1986年2月でした（参照、リビング・ストリーム・ミニストリー出版、長老訓練、第1巻 第8巻）。これらの三つの長老訓練のうち二つの訓練集会の序言で、わたしは分裂の危険性について述べました。

主の回復の唯一の働きの中で特別な働きを行なう意図

わたしたちの間にある現在の問題は過去に隠されていたものから出て来ました。これらの隠された事柄の一つは主の回復の唯一の働きの中で特別な働きを行なう意図でした。回復の中で一つの確定的な働きがあります。それは地方召会の建造を通して宇宙的なキリストのからだの建造にもたらすことです。これがその働きです。しかし、わたしたちの間で働きの中で特別な働きを行ないたいという人がいたのです。この人物は回復を離れたり、召会生活を放棄したりするつもりはありませんでした。ところが彼は回復の中において自分自身の努力によって自分自身の特別な働きを持つことを主張したのです。

分離した領域を保つ傾向

もう一つの隠された分裂的要因は分離した領域を保つ傾向です。神の永遠のエコノミーを達成するための主の働きと動きは唯一無二です。もしどこかの地域が自分の特別な領域として、主の唯一の働きにあずかっている地域であると考えたら、これは分裂の原因、あるいは分裂的要因となります。分離した領域を保つ傾向でさえ、根こそぎにされる必要があります。わたしたちは彼の尺度の度量にしたがって（コリント 10:13-16）、主のための働きをなすべきですが、主が特別な領域として自分に割り当てたものと考えるべきではありません。自分の地域での地方的な働きは主の宇宙的なからだのためであるべきです。わたしたちは新約聖書の中で主の働きにおける管轄権のようなものを見ることはできません。

一つの働きを他の働きとミングリングしない方法

過去において一つの働きを他の働きとミングリングしない方法で働く隠された要因がありました。新約聖書はわたしたちに、主に対するペテロはおもにユダヤ人の地で働き、パウロはおもに異邦人世界で働きましたが、彼らは共にキリストの一つからだのためであり、何の区別も分離もなかったことを示しています。神の新約エコノミーを遂行する上で、彼らは一でした。ペテロの働きの効果はコリントにおいて実現され（コリント 1:12）、パウロはエルサレムに行って、そこで使徒たちと長老たちと交わりました（使徒 15:2, 4, 21:17-20 前半）。体の血液の循環のように、交わりは神聖な命の循環の中でキリストのからだを助けます。それは主の回復のための種々の働きを一つ動きの中へとミングリングします。もしわたしたちの働きがこのような交わりに欠けるなら、これは分裂のもう一つの要因に発展することでしょう。

主の働きの中で目立った人物になることを秘かに期待する

主の働きの中で目立った人物になることを秘かに期待することもあります。わたしたちはこのような「野心という野ねずみがいる」ことを否定することができません。もしあなたに野心があり、また能力もあるなら、あなたの能力は野心を中和させるので問題がなくなるかもしれません。今日、わたしたちの間にある問題は数名の兄弟たちに野心があっても能力がないことです。野心プラス能力不足が真の問題なのです。

すべての野心のある兄弟たちに能力があったなら、彼らの能力はその野心の醜さを飲み尽くすことができたでしょう。しかし彼らに野心があるのに能力がないなら、能力不足の

野心が彼らを脱落者とならせるのです。もしあなたが目立った人物になることを願い、それに能力があるなら、あなたはそのような人物になるかもしれません。もしすべての召会があなたの助けを受け、すべての召会があなたに耳を傾けるなら、あなたは目立った人物になるかもしれません。しかし能力もないのに目立った人物になりたいなら、これはわたしたちの間で問題となります。

わたしたちは使徒行伝の中でバルナバとパウロに能力の相違を見ることができます。バルナバは主によって用いられ、後にパウロとなったサウロを務めにもたらししました（使徒 9:26-27、11:22-26）。さらに使徒行伝第 13 章でアンテオケで預言者や教える者たちの名が記録された時に、その霊はバルナバの名を先に述べて、バルナバとサウロを働きのために選び分けたと言います。彼らが出て行って間もなく、能力の問題が起きました。その旅の初めでは、いつもバルナバが先に述べられました（2、7 節）。しかし、やがてパウロの名が先に述べられるようになります（9、13、16、46、50 節）。パウロの名が先に記述されたのは、その時の必要に彼の能力がバルナバの能力にまさり、結局パウロがおもな語り手になりました（14:12）。パウロが彼らの旅行で導くことを始めたのは、彼により大きな能力があったからでした。バルナバはパウロが持っているほど大きな能力がありませんでした。後に、パウロは 14 書簡を書きました。パウロが語ったほど深く、また高く、だれが語る事ができたでしょうか？ 新約聖書のすべての著者のうち、「キリストのからだ」という用語を使ったのは、パウロただ一人でした。他の著者はこの用語を使わなかったし、「エコノミー」という用語を使いませんでした。彼らがパウロほど大きな能力を持っていなかったからです。

バルナバとパウロがアンテオケに旅行から帰ったとき、割礼について大きな問題が起きました。そこでアンテオケに在る召会はその問題の解決のために彼らをエルサレムに送り出しました（使徒 15:1-3）。割礼の問題が解決されてエルサレムからアンテオケに戻った後、彼らは再び旅行をしたいと思いました（36 節）。この時点でバルナバはその旅でバルナバのいとこのマルコと呼ばれるヨハネも（37 節、コロサイ 4:10）、一緒に連れて行くつもりでした。しかしパウロはマルコを連れて行くことに同意しませんでした。なぜならマルコは彼らの最初の務めにおいてバルナバとパウロから否定的な方法で身を引いたからです（使徒 13:13 とフットノート 1）。マルコを連れて行くバルナバの願いは彼自身の愛情によるものでした。その結果、バルナバとパウロは互いに別れてしまいました（15:39）。その時からバルナバは諸召会を訪問に出かけたとしても、使徒行伝の聖なる記録に関するかぎり彼の務めは終わりました。

わたしの理解によれば、バルナバとパウロの問題はおもに二つの点から成っていると思います。第一に、バルナバは内側に何か隠された不満があったのかもしれませんが。なぜならバルナバは初めにおいて導き、後ほどバルナバの能力が小さかったゆえにパウロが導くことを始めたからです。これに勝利するのは容易ではありません。もしバルナバがこのように発展することに満足していたなら、それはバルナバに大きなあわれみがあったことでしょう。第二に、使徒行伝第 15 章の記録によれば、バルナバはマルコと呼ばれるヨハネを連れて行くことで正当な原則を保ちませんでした。ある意味で、彼はこのことを自分のいとこに関する個人的な愛情のゆえに行なったのでした。これは霊的原則に対する違反です。マルコが学課を学ぶように、マルコと呼ばれるヨハネを連れて行かないほうがよいと

いうパウロの方法に、バルナバは従うべきでした。ところがパウロに従うどころか、バルナバは独自の道を取り、この結果バルナバとパウロは互いに別れてしまったのです。パウロはバルナバよりも大きな能力を持っていました。このゆえにパウロは結局その務めを導く人でした。

この国で二十五年以上の間、わたしは決して人々に自分が使徒であると言ったことはありません。しかし過去この数年において、ある兄弟たちが使徒について頻りに語り始め、使徒は一人でなく、わたしたちの間に多くの使徒がいると言ったのです。これは恥ずべきことです！ 1988年8月28日、アナハイムに在る召会の集会の中で、ある兄弟がアナハイムに在る召会の立場について16の点を提示しました。その中の一つは今日わたしたちの間で使徒は一人でなく多くの使徒がいるというものでした。関心のある聖徒たちにはこれらの使徒たちのリストを与えると、彼は言ったのです。一人の兄弟はその兄弟からそのようなリストを求め、それを受け取りました。そのリストには7人の名前があり、その名前のうち一人には疑問符が付いていました。そのリストを与えるとされた人の名前は含まれていませんでした。

このリストに関する知らせを受けて間もなく、わたしは台北に行きました。そして三種類の使徒たちについてメッセージをそこで与えました（参照、リビングストリームミニストリー出版、時機を得たラップと現在の必要）。そのリストに挙げた七人の兄弟たちはみな、わたしの務めの下にありました。そのような使徒たちに関する真理によれば、このことはテモテ、テトス、シラスのような人を主が直接、使徒として立てることによって生み出された使徒とすることです。このメッセージが出版された後、今日、使徒たちはいないという別の言葉が出て来ました。これはジョン・ネルソン・ダービーが教えたのと似ています。後になって別の言葉が出て来ました。それによると、使徒たちは主イエスによって選ばれた十一人とパウロの十二人だけであるというものです。そして使徒行伝第1章でくじを引いてマッテヤが選ばれたのは間違いであったと言いました。しかし聖書によれば、ペテロがペンテコステの日に立ち上がったとき（2:14）、彼はマッテヤを含む十一人と共に立ち上がりました。

このような語りかけは何であれ語る者に対する利益に基づいており、それには真理の基準というものがありません。これは基本的な問題です。

主の回復の中で同じ心・思いを保つことに関する無視

過去におけるもう一つ大きな分裂の要因は主の回復の中で同じ心・思いを保つことに関する無視です。1986年2月の長老訓練の中で、わたしの負担は長老たちに主の回復の中で同じ心・思いを重要視することを求めることにありました。四百人以上の兄弟たちがわたしに手紙を書いて署名し、同じ心・思いを保つように努めることを約束しました（参照、リビングストリームミニストリー出版、長老訓練、第8巻、主の現在の動きの命脈）。しかし過去三年の反逆において、数人の兄弟たちはその手紙を罪定めし、その手紙の一部は異端的であるとさえ言いました。彼らの二人はわたしに、その手紙から自分たちの署名を取り消してほしいと手紙を書いてきました。このことは彼らが同じ心・思いの真の意味について明らかでなく、それを軽んじたことを示しています。

以上述べたように過去における分裂の要因は主の回復の中で同じ心・思いを保つことを

無視したことの強い証拠です。わたしたちの間にある騒動は正しいか間違っているかの事柄でなく、このことを無視した結果であり、そのことが完全に明らかになったのです。この現れは明確にわたしを引き下ろすまで戦うというところにまで発展し、反逆する者たちの何人かはそれを人々に告げたのです。このことは彼らが同じ心・思いを顧みようとしなかったことを強く示しています。これは確かに分裂の隠れた要因です。

わたしたちの間にある現在の騒動はわずか一日で発展したわけではありません。川の氷が数フィートの厚さになるには相当の期間かかります。わたしたちの状況も同じく何年も不愉快な事柄の積み重ねがあったのです。わたしは初めのうち反対や批評について何も気づきませんでした。わたしは台北で忙しかったのです。しかし 1987 年 12 月に戻りましたが、兄弟たちがやって来て、彼らの計画にしたがって要求したとき、わたしは何か恐ろしい悪事があることに気づき始めたのです。彼らの計画とは事実上彼らの陰謀でした。

原則的に主の民の間にある騒動と問題は二つの源から出て来ます。一つは人の源から、もう一つはサタンの源です。わたしたちの間にある状況を過去三年以上も観察し考慮した後、この騒動は邪悪な者、敵サタンによって始められた（マタイ 13:19, 28）と、わたしは信じます。それは暗やみの領域からのものであり、務めを破壊し、新しい道に対するドアを閉ざさせようとするものです。サタンは務めを憎み、また新しい道をも憎んでいます。新しい道を伴うこの務めは敵の邪悪な企てに対する大きな妨害であるので、サタンと邪悪な霊どもは何事かを行なおうと非常に強く動いたのです。その結果、何人かの兄弟たちは捕らえられ、邪悪な霊によって用いられ、全く不合理で、理屈に合わない、非人間的な事柄を行なっているのです。彼らは人々に対して、わたしが老齢で、もはや物事をはっきりと判断できないと告げました。これは偽りです。このような事柄はすべて、この騒動が悪魔からのものであることを明らかに示しています。

しかしながら、この騒動にもかかわらず、主のあわれみと恵みによって、世界中の大部分の諸召会は積極的に依然として前進を続けています。長老集会に参加した長老たちによって与えられた彼らの現状報告は全く勇気づけるものです。これらの報告は「全世界における回復の諸召会の現状」という題で別の本で印刷されます。できるかぎりリビングストリームミニストーリーから入手してください。無料です。（主の回復の現在の騒動と今日の主の動きの方向、9-24 ページ）

神の定められた道にしたがった召会生活の実行

からの抜粋

今季の訓練において、わたしはすべての訓練生たち、特に若い人たちについて深く心配しています。わたしがこの章であなたがたに交わろうとすることは、主の回復の中のすべての聖徒たちにも助けになると思います。1987年9月の初めに、長年わたしたちの間にいた一組の兄弟たちがはっきりと異議を唱え出したことを、あなたがたは聞いたと思います。過去四年にわたって、彼らは分裂的で、人を大いに惑わす多くの事を語ったばかりか、それらを書き物にさえしました。この期間、わたしは彼らと争わないという態度を取ってきました。この件についてわたしはあまり多くを語りませんでした。積極面では、主からの負担を受けて、神聖な御言についてますます多くのメッセージを解き放しました。彼らの陰謀が明るみに出て、1988年の夏から、わたしの語る量は増えていきました。1988年に、まず最初に「レビ記のライフスタディ」を行ないました。そして、1989年から1991年の間に、民数記、申命記、イザヤ書、ダニエル書、ゼカリヤ書、エレミヤ書、哀歌と続けて行ないました。今、わたしは今年の夏の訓練で小預言書を終わらせて、旧約の預言書のライフスタディをすべて完了するつもりでいます。同時にわたしは旧約のこれらの書のライフスタディのほかに、シアトル、クリーブランド、アトランタ、パサディナ、サンディエゴ、台北、パークレー、アナハイムを含むさまざまな都市で、多くの特別集会を持ちました。これらの特別集会において、わたしは回復のための幾つかの極めて重要なメッセージを解き放ちました。

このメッセージと次のメッセージで、わたしはこの機会に主の回復の現状を、すべての聖徒たちにはっきり示したいと思います。それによって、わたしたちは自分たちが今どこにいるのか、また、今の状況にどう直面したらよいかかわかるでしょう。繰り返しますが、わたしはだれとも争うつもりはありません。何年間にもわたるわたしの務めの中で、わたしは消極的な面での事柄を強調することによって、主の働きを行なったことはありませんでした。むしろ、わたしは常に積極面の事柄を人に分け与えることによって働いてきました。ですから、この章でわたしが語ろうとしている事も消極的なものではなく、とても積極的なものです。

前のメッセージで、わたしたちは神の定められた道にしたがった召会生活の実行の必須条件の四つの点を扱いました。このメッセージでは、続けて第五点と第六点を交わります。

主の回復の現状について明解な展望を持つ

必須条件の第五点は、主の回復の現状について明解な展望を持つことです。わたしたちは主の回復の中にいるのですから、回復の今の状況を認識しているべきです。わたしたちは無関心にならず、真の状況を知るべきです。このために、わたしたちはあらゆる問題の内在的な性質に迫る必要があります。

創造における神の定められた原則によれば、すべてのものに二つの面があります。一枚の薄い紙にさえ両面があります。そればかりか、神の定めによれば、多くのものが存在するためには二つの面だけでなく、外側のおおいと内側の実際も必要になります。くるみは実であり、その外観は固くて、でこぼこしています。しかし、くるみの外側の殻は実際のくるみではありません。実際のくるみは、殻を指すのではなく、その中の核の部分を言い

ます。くるみを食べる場合も、殻を食べるのではなく、核の部分を食べます。くるみの殻とくるみの核の部分は二つの違ったものです。

エレミヤ書はくるみにたとえることができます。長年、わたしはこの書を誤解していました。初めてエレミヤ書を読んだ時、わたしはそれをあまり高く評価しませんでした。それでも、その中にある二つの節を決して忘れることができませんでした。一つは第 17 章 9 節です。「その心は、すべてのものに勝って偽り、それは直らない。だれが、それを知ることができよう?」。わたしは、若いころから、その節を覚えていました。それは人の心は偽りであるので、自分の心を含む、どの心にも信頼しないように、わたしは助けられました。二つ目の節は第 13 章 23 節です。「クシ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか? もしそれができるならば、悪を行なうのに慣れたあなたがたでも、善を行なうことができる」。この節は、人の罪深い性質は変わることはないと言います。エレミヤは人の罪深い性質を二つの事にたとえました。すなわち、クシ人の皮膚とひょうの斑点です。これら二つのものを変えることができないように、人の罪深い性質を変えることはできません。1991 年の冬の訓練のために、エレミヤ書のアウトラインを書いていた時、わたしはエレミヤ書の核の部分に内在的に入らざるを得ませんでした。その時、主はわたしにこの書の内在的な内容を見せてくださいました。

徹底的な祈りによって

主の回復の現状について明解な展望を持つ方法は、徹底的な祈りによります(エペソ 1:16、3:14)。あなたがたは異議を唱える者たちが言った事を聞いたなら、それをうのみにしてはなりません。彼らが言っているこれらの言葉は「殻」にすぎず、「核の部分」ではありません。あなたがたは、主の回復について何かを聞いたなら、それをすぐに信じるべきではありません。あなたがたは祈りの中でそれを主の前にもたすべきです。あなたはただ一度祈るだけでなく、あなたの聞いたことについて繰り返し、徹底的に祈るべきです。

知恵と啓示の霊の中で

今の状況についての明解な展望を持つために、わたしたちは知恵と啓示の霊を持つ必要があります。パウロは、エペソの人たちが神のエコノミーを内在的に知ることを願いました。このことについて、彼は二度祈りました。エペソ人への手紙第 1 章 17 節で、彼はわたしたちが知恵と啓示の霊を持つように祈りました。彼は思いや感情について祈ったわけではありません。彼は霊について祈りました。そして、この霊は知識と理解の霊ではなく、知恵と啓示の霊です。神のエコノミーを内在的に知るために、知識と理解以上に必要なのが、知恵と啓示の霊です。

次に、エペソ人への手紙第 3 章 14 節から 19 節で、「こういうわけで」、すなわち、キリストがわたしたちの心の中にホームを造ることができるようになるほどまで、わたしたちがキリストを知るように、パウロは祈りました。この特別な理由のために、パウロは軽々しく祈ったのではなく、むしろ、父にひざをかがめて、熱心に、正しい方法で祈りました。

偏見を持たない

主の回復の現状について明解な展望を持つには、偏見を持つてはなりません。わたした

ちは偏見をもって何かを言うてはなりません。むしろ、わたしたちは静かにしていることを学び、あらゆる問題を主のもとにもたらしすべきです。

えこひいきしない

今の状況の明解な展望を持つには、えこひいきをしてはなりません。すなわち、いかなる論争でも、どちらか一方を支持してはなりません。

個人的な愛情を持たない

わたしたちはまた、個人的な愛情を持たないで状況を眺めることを学ばなければなりません。わたしたちは何に対しても、個人的な好き嫌いを言わないよう学ぶべきです。わたしたちは、自分が何者であるかを知る必要があります。わたしたちは何者でもありません。わたしたちは主の小さなしもべです。そして彼の大きな家の中で、わたしたちはある事が好きだとか、嫌いだとか言うべきではありません。わたしたちは、「もし主がわたしにそれを差し出されるなら、わたしはそれを取ります」と言うべきです。

意見を持たず、霊的な識別力に満ちている

最後に、わたしたちは意見を持たず、霊的な識別力に満ちていなければなりません（コリント 14:29 後半）。英語の小文字の o（オー）、c（シー）、e（イー）は、見分けが付かない場合があります。もし識別力を働かせないなら、間違った読み方をしてしまいます。中国語にも、とてもよく似た字がたくさんあります。例えば、「天（heaven）」という中国語と「天（monster）」という中国語はほとんど同じです。ですから、ときどき見分けがつかなくなります。

異議を唱える者たちが掲げる二十の問題の内在的な本質に迫ろうとする時、どの一つも単純ではないことがわかります。どれもが難問です。これらの二十項目は、異議を唱える者たちの中に一つの陰謀があることをはっきりと見せています。陰謀がなければ、だれもこれらの項目を考え付かなかったでしょう。これらの項目の内在的な本質に入り込むためには、どんな意見も持たず、霊的な識別力にあふれていなければなりません。

異議を唱える者たちが掲げる現在の問題を識別する

過去四年半の反逆のゆえに、多くの消極的な事柄が異議を唱える者たちによって語られました。その中の多くは書き物にして配られ、スローガンとさえなりました。これと次のメッセージの中でのわたしの意図は、異議を唱える者たちが掲げた二十の「問題」について、あなたがたと交わることです。

管理の問題

第一の問題は、管理の問題です。この中には四つの項目があります。その中でも、彼らがわたしを罪定めする主要な事は、わたしとリビングストリームミニストリーが諸召会を管理しているという点です。

訓練センターによる「管理の中央集権化」

異議を唱える者たちは、「管理の中央集権化」という用語を用いています。1987年9月に彼らの陰謀が明るみに出た時、わたしは台湾で全時間奉仕者の訓練を指導していました。その年の12月に、わたしはアメリカに戻りました。そのすぐ後に、四人の異議を唱える者たちがわたしの所にやって来ました。初めに口を開いた者が、この「管理の中央集権化」という用語を用いました。わたしはその時までそのような言葉を聞いたことがありませんでした。わたしがこの用語の意味について思案していると、この兄弟はわたしに、台北の訓練センターは、彼らによって、この地上のすべての召会を管理する本部であると考えられると言いました。彼はまた、地上のすべての召会に集会の時間を台北の訓練センターに報告させているのは、まぎれもなく管理であると言いました。わたしは初めてそんなことを聞きました。彼は、これがすべての召会を管理するわたしの方法であると言いました。さらに彼は、わたしは青年たちを台北の訓練センターで訓練した後、最終的に、彼らはあらゆる教えを受け、それぞれの召会に戻って、わたしのために召会を管理するように命じられていると言いました。そして、四人目の兄弟は続けて、台北の訓練をばらばらに解体させるべきであると強い言葉で言いました。

訓練、特別集会、メッセージ、テープなどによる管理

異議を唱える兄弟たちはまた、わたしが訓練、特別集会、メッセージ、テープなどを使って、諸召会を管理していると言って、わたしを非難しました。1989年3月19日、異議を唱える者の一人が、長老職を辞めた時、アナハイムに在る召会に対し、次のように述べました、「召会に対する管理は浸透しつつある……そのような管理のほとんどは直接的に行なわれているのではなく、ビデオ、特別集会、訓練、長老集会を通して間接的に行なわれている」。この言葉は、わたしが務めの中で行なっていること（教え、訓練、出版物、オーディオテープ、ビデオテープ）はすべて、諸召会を管理するためであるという意味です。

非常に積極的な意味で、わたしの務めは確かに人を「管理」します。もしあなたが麻薬に手を出そうとするなら、わたしの訓練はあなたを「管理」するでしょう。もしあなたが妻に短気を起こそうとするなら、わたしの書いた本があなたを「管理」するでしょう。わたしの訓練、特別集会、出版物、テープが、世界中の何千という人々を大いに管理しているのは事実です。そのような管理がなければ、多くの人は自分自身や家族を傷つける事を行なうでしょう。その意味から言えば、わたしの務めが人々を「管理」していると言うのは事実です。

いかなる啓発にも、ある程度の「管理」はあります。学校、授業、教師、教授は、みな学生を管理します。わたしの務めは、とても積極的な意味で、聖徒と諸召会を管理していますが、異議を唱える者たちはわたしの務めを中傷するために、とても消極的な方法で管理していると言います。これはわたしがあなたがたに、彼らの言った事を聞く時、単に見かけや「殻」に反応すべきでないと言った理由です。あなたがたは自分の聞いた事を主のもとにもたらさなければなりません。そうすれば、主は殻の中にある内在的なものをあなたに見せるでしょう。

「王」、「王の哲学」

第三に、異議を唱える者たちの一人は、わたしたちの間には「王」の問題があると言い

ました。彼はまた「王の哲学」の問題があると言いました（参照、リビングストリームミニストリー出版、「現在の反逆の発酵」）。これは、異議を唱える者たちが、陰謀をたくらんで、王の哲学をやめさせようとしていることを意味します。「王の哲学」という用語を使うことによって、彼らは回復の中に、はっきりした指導者に対する強力な教えがあることを意味します。ここの「哲学」という言葉は論理や教えを指し、王は指導者を指します。

新約聖書には、ある意味で、神の民の間に、はっきりした指導者の哲学、教えがありますが、別の意味では、そのような教えはありません。新約の二十七冊のうち、十四の書簡は使徒パウロによって書かれています。その書簡の中で、彼は非常にはっきりとリーダーシップを強調しています。コリント人への第一の手紙第4章16節、第11章1節、ピリピ人への手紙第3章17節で、パウロは聖徒たちに対して、わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたはわたしに倣う者になるようにと懇願しています。ヘブル人への手紙第13章17節で、彼は信者たちに、「あなたがたを導く人たちに従い、彼らに服しなさい」と命じています。このような節は、新約の中にリーダーシップについての教えがあることを見せています。しかしながら、新約も、わたしの務めも、だれかに王になるように教えてはいません。使徒パウロはリーダーシップについてはっきりと教えました。使徒たちは、コリント人への第二の手紙第4章5節で、キリスト・イエスを主として、自分たちをイエスのための信者たちの奴隷として宣べ伝えました。これは、わたしたちが王ではなく、聖徒たちに仕える奴隷であることを示しています。

「王」と言うとき、異議を唱える者たちは、おそらくわたしのことを指しています。わたしは三十年以上もアメリカ合衆国の聖徒たちや諸召会と共にあります。わたしがいったいだれに対して王になったと言うのでしょうか？ わたしに対するそのような申し立ては、単なる中傷であるだけでなく、非難でもあります。

リビングストリームミニストリーのオフィスによる諸召会の管理

第四に、異議を唱える者は、諸召会を管理していると言って、リビングストリームミニストリーのオフィスを非難しました。しかし、どこの召会がミニストリーによって管理されたと言うのでしょうか？ 彼らは、ミニストリーが諸召会に、ある事を行なうように要求し、命令を下していると言います。しかしながら、このような非難は正しくありません。リビングストリームミニストリーのオフィスは、何百という諸召会に仕えています。ミニストリーは諸召会に命令を出しているのではなく、彼らに協力を求めているだけです。例えば、本を出版する場合、何冊にすべきか決めるのは難しいのです。当初、わたしたちはその数を把握できませんでした。その結果、ある本は必要以上に印刷されました。ついに、ミニストリーは諸召会にお願いして、本とテープのスタンディングオーダーの注文を取ることにしたのです。ミニストリーのオフィスにとって、これは大助かりでした。時には、スタンディングオーダーに協力してもらえない場合もありますが、その場合でも、ミニストリーは注文書を送ってくれるようお願いしています。これは、召会に要求しているのではなく、協力をお願いしているのです。ミニストリーはまた、年に二回の訓練用のテープの配送とテープを見ることを諸召会の間で協力しながら行なってもらっています。ミニストリーが諸召会と連絡を取り、協力してもらっているのは、おもにこういう事柄です。これ以外の事で、リビングストリームミニストリーのオフィスがどこかの召会を管理した

という証拠を見つけることはわたしにはできません。そのような非難を聞いてから、わたしはどこかにミニストリーの管理の下にあると感じている召会があるなら、わたしに知らせてくれるようお願いしましたが、これまで、このような非難はどここの召会でも確かめることができませんでした。

(2) ミニストリーとその奉仕者たちによって建て上げられた聖職者階級

1987年12月にわたしが台北からアナハイムに戻ると、異議を唱える者の一人から、わたしに一通の手紙が届いていました。彼はその長い手紙の中で、わたしを非難し、主の回復の性質は変わったので、自分はこの働きから退くよりほかに方法がないと書いてありました。その後、彼は再び手紙をよこし、わたしが聖職者階級を建て上げ、諸召会を征服し、管理していると言って非難しました(参照、「現在の反逆の発酵」)。12月の終わりに、わたしは冬の訓練を顧みるために、アービンに行きました。冬の訓練期間中に主日、わたしはこの兄弟をわたしのアパートに招待しました。おそらくそこには六、七人の兄弟たちがいたと思います。わたしは彼に言いました、「兄弟……あなたはわたしあての手紙(1987年12月16日付)の中で、ミニストリー・オフィスが聖職者階級を建て上げていると非難しました。どこにそのような証拠があるのか、わたしに示してください。どこにそのような真の聖職者階級があるのでしょうか? もし本当にあったなら、まず最初にわたしがそれを取り壊します」。彼はしばらくためらったまま、何も言いませんでした。そして、彼は「その傾向があります」と答えました(参照、「現在の反逆の発酵」)。彼は手紙の中で、聖職者階級が建て上げられている、とはっきり言ったのに、今は彼は言い方を変えて、その傾向があると言いました。地上のすべてのものには傾向があります。わたしはまだ死んでいませんが、わたしたちには死んでいく傾向があります。これが倫理的な標準なしに、反逆が進んで行った道筋です。

現在、中国大陸を除いて、地上には、だいたい千二百の諸召会があります。わたしはすべての諸召会に尋ねます。あなたの召会が、わたしか、もしくは、ミニストリー・オフィスによって建て上げられた聖職者階級の下にあると言うなら、わたしにそう言ってください。今の所、わたしにこの事を指摘した人はいません。

(3) 務めの体系

異議を唱える者たちはまた、務めは一つの体系になっており、すべての諸召会はこの実体の中に組織化されていると言いました。ローズミードに在る召会は、ウイットネス・リーの「組織」には加わりたくないと言いました。ローズミードの集会所は、ロサンゼルスのエルデンホールの売却資金で建てられました。それはわたしの手によって獲得されたものです。その上、リビングストリームミニストリーはローズミードに在る召会に十萬ドル献金しました。やがて、ローズミードの反逆者たちは、その集会所を乗っ取り、二人の真実な長老、フランシス・ポールとジョン・クワンを書面を通じて、立ち退かせました。これら二人の兄弟たちは、正しく任命された長老であって、聖徒たちからも受け入れられた人たちでした。しかし、その時、反逆者たちは集会所を乗っ取った上、二人の長老に手紙を送り、「これから先ローズミードに在る召会の土地に足を踏み入れることはできない。もしそうした場合には、力づくで立ち退かせる」と言い渡しました(参照、現在の反逆の

発酵)。

(4) もはや地方召会ではなく、「務めの召会」である

反対者たちはまた、務めのための召会は、もはや地方召会ではなく、「務めの召会」であると言いました。ノースカロライナのローリーに在る召会の責任者たちが、わたしに会いに来ました。彼らは多くの本を持ってきましたが、その中のある段落には下線が引かれていました。その一冊は、ニー兄弟の「正常なキリスト者の教会生活」(リビングストリームミニストリー出版)でした。そこでニー兄弟は、中国に渡った宣教師たちは地方召会を建てる代わりに、ミッション教会を建てたと言いました。すべてのミッションは、それぞれの名の下に召会を建てました。ニー兄弟は、宣教師が中国で福音を宣べ伝えるのは正しいが、自分たちの宗派の教会を建てるのは間違っているとしました。彼らは福音を宣べ伝えて、地方召会だけを建造すべきでした(参照、「正常なキリスト者の教会生活」)。ローリーから来た責任者たちはこれをわたしに適用して、あなたが建てているのは地方召会ではなく、あなたの務めのための召会ですと言いました。彼らは「罪定めされている者の頭から帽子を取って、それをわたしの頭にかぶせる」べきではありません。

わたしは「務めの召会」を建造したことなど一度もありません。わたしは主の回復に六十年間いて、絶えず労苦してきました。わたしはまたニー兄弟と共に二十年いました。ニー兄弟もわたしもこれまで自分自身のために召会を建てたことなどありませんでした。主の務めを通して建てられた諸召会は「務めの召会」ではありません。パウロの務めによって多くの諸召会が建てられましたが、どの一つをも「パウロの諸召会」と呼ぶのは正しくありません。コリント人たちの中には、「わたしはパウロにつく」、「わたしはアポロにつく」、「わたしはケパにつく」と言う人たちがいました(コリント 1:12)。しかしパウロは最後に、パウロも、アポロも、ケパも、あなたがたのものである、なぜなら、すべてのものは、あなたがたのものだからであると言います(3:21-22)。宣教師たちは中国へ渡り、そこに彼らのミッション教会を建てました。しかし、わたしたちの務めが建てているのは、「務めの召会」ではなく、地方召会です。現在、この地上に、わたしたちの務めによって建てられなかった地方召会を見いだすのは困難です。このように、彼らがわたしを非難するのは公正な事ではありません。

(5) 地方召会の自治

1988年の春から、異議を唱える者たちは地方召会の自治を教え始めました。彼らの教えはG・H・ラングの書いた「神の諸教会」という本を基にしています。彼らはこの本をたくさん購入して、聖徒たちに渡しました。

地方召会の自治の教えは、もちろん間違っています。召会が完全に自治的になることはできません。アメリカ合衆国は、五十の州から成る連邦国家です。ある意味で、各州は州独自の政府を持った自治体です。だからと言って、完全に自治的であるわけでもありません。五十州すべては国家防衛のため、外務のために一つの政府、最高裁(連邦裁判所)によって保たれる一つの憲法、同じ通貨、一つの郵便事業、州内を縦横無尽に走る連邦幹線道路を持っています。多くの事で、五十州が自治的になるのは不可能です。

地方召会が完全に自治的になるというのは、おかしいことです。すべての召会はキリス

トの一つのからだです（エペソ 4:4 前半）。わたしたちの体のどの部分が自治的であり得るでしょう？ 手は小さな自治体で、肩は大きな自治体で、ももはさらに大きな自治体でしょうか？ もしそうであれば、体は死んでしまいます。体のあらゆる部分は同じ血の循環を持っています。ですから、キリストのからだが自治的になるのは不可能です。1988年の夏から、その年の終わりまで、わたしはこの自治の教えの間違った考えを暴露するために数多くのメッセージを語りました（参照、リビングストリームミニストリー出版、時機を得た言葉、キリストのからだ、時機を得た宣告と現在の必要、キリストのからだの建造、キリストのからだの建造に関するさらに進んだ光）。それ以後、異議を唱える者たちの口から、この誤った教えを聞くことはあまりなくなりました。これは、あるいは彼らが真理を持っていないことを悟ったのかもしれませんが。

（6）長老たちを任命した後、使徒たちはその地方召会から手を引く

異議を唱える兄弟たちはまた、使徒たちは長老たちを任命した後、その地方召会から手を引くべきであると言いました。使徒パウロはエペソで長老たちを任命した後、召会から手を引きませんでした。むしろ、彼は何度もそこを訪れて、召会と接触を持っただけでなく、召会に手紙を書きました。一時、彼はエペソに三年間滞在したこともありましたが（使徒第 19 章、20:31）。また彼は使徒行伝第 20 章でエルサレムに旅した時、エペソに近い地域を通り、エペソの長老たちをミレトに呼び出しました（17-38 節）。そして彼は長老たちに、アジアにいた間、「あなたがたと共にあって……益ある事は何でも、残すことをしないで、あなたがたに言い表し」、しかも、「わたしが三年の間」、「公にも、また家から家でも、あなたがたを教え」、「涙をもって、一人一人を絶えず訓戒してきた」（18、20、31 節）と言いました。エペソに長老たちを任命した後、もちろんパウロはエペソに在る召会から手を引きませんでした。

召会を設立し、長老を任命した後、諸召会から手を引いてしまうと、使徒たちのすることは何もなくなってしまいます。しかし、エペソ人への手紙第 4 章 12 節は、使徒は聖徒たちを成就するためにあると言っています。異議を唱える者たちは、自分たちの教えを擁護するために、ニー兄弟が書いた「正常なキリスト者の教会生活」の一節、「いったん召会が設立されると、すべての責任は地方の長老たちの手にゆだねられ、その日から、使徒たちは『いかなる問題』をも管理しなかった」を引用しました。しかし、ニー兄弟はその後、「召会の諸事」という本の中で、彼が誤用したこの言葉を修正しています。その中で、ニー兄弟はこの一つの事柄を詳しく述べています。彼は彼の同労者たちに対して、このように述べました、「ある地方召会の長老たちを任命した後、彼ら（使徒）はそこにとどまり、長老たちを教え、訓練し、また、どのように召会を顧みるか彼らに示さなければなりません」（参照、「時機を得た言葉」、「時機を得た宣告と現在の必要」）。

上海に在る召会は 1926 年に起こされましたが、ニー兄弟によってではありませんでした。その翌年に、ニー兄弟は上海に来て、上海に在る召会を強め、確立したのです。その年の 1927 年から、投獄された 1952 年までの二十五年間、彼は上海を去ることなく、そこにずっと居続けました。上海に在る召会は、その期間、彼の手元にありました。

異議を唱える者たちは、使徒たちの時代には使徒は十二人しかいなかった、すなわち主イエスによって任命された十一人（マッテヤを含まない）と、十二人目のパウロであると

言いました。そこで、わたしはこれはブラザレンによって広められた古い教えにすぎないと言いました。ニー兄弟は、「正常なキリスト者の教会生活」の中で、この教えを修正しています。ニー兄弟は、その本の中で、使徒職について長々と説明しています（参照、「使徒たち」、第 1 章）。すると、彼らは自分たちの言っていることを変更して、御言によれば、使徒たちはいつも複数で書かれていると言ったのです。彼らのうちの一人は、今日、多くの使徒たちがいるが、彼らの名前を挙げるができると言いました。その後、彼は聖徒の一人に、特定の兄弟たちの名前を挙げました。わたしはこの種の話聞いた後、台北に行き、「さまざまな種類の使徒たちと、彼らの関係」（参照、「時を得た宣告と現在の必要」、第 2 章）と題したメッセージをしました。そのメッセージの中で、わたしは聖書には、ただ三種類の使徒しかいないと指摘しました。（1）主によって直接任命された人、主の啓示によって直接構成された人、例えば、ペテロやヨハネやパウロ、（2）アポロのように他の人によって成就された人、（3）主が直接、任命された使徒たちによって生み出された人、例えば、テモテやシラスやテトスです。わたしはまた、聖書によると、第三種類の使徒たち、すなわち、主が直接任命された使徒たちによって生み出された人は、彼らを生み出した人によって導かれ、指導されたと指摘しました。テモテやシラスやテトスは第一種類の使徒たちではありませんでしたが、第三種類の使徒たちでした。同じように、異議を唱える者たちが今日の使徒として名前を挙げたこれらの兄弟たちは、みなわたしの生徒たちです。ですから、彼らもまた主によって直接、起こされ、任命された使徒たちではありません。最終的に、異議を唱える者たちは自分たちの言っていることを再び変更し、今日、使徒はいないと言いました。

（7）1984 年以降、務めは命と命の供給から、予算、数、活動、

その他の実行へと変更し、この変更は回復の性質に影響を与えている

異議を唱える者たちはまた、1984 年以降、務めは命と命の供給から、予算、数、活動、その他の実行へと、変更し、そして、この変更が回復の性質に影響を与えていると言いました。このような言葉は、おもにヨーロッパで多く聞かれました。彼らは、1984 年以前、ウイトネス・リーは正しかったが、1984 年以降、彼は間違っていると言いました。なぜなら、彼は命について何も教えなくなったからと言いました。そして、1988 年の終わりに、陰謀をたくらむ四人の指導者の一人が、サンディエゴの一団の兄弟たちに向かって同じ言葉を語りました。1984 年以降のわたしの語りかけを聞いている者たちは、これが偽りであると証しすることができます。そのような偽りが、異議を唱える者たちの戦略の一部でした。

（8）務めの教えに対して

異議を唱える兄弟たちはまた、務めの教えに対しても問題を提起しました。使徒行伝第 2 章 42 節で、その書の著者であるルカは、「使徒たちの教え」という表現を使いました。この表現を解釈するなら、使徒たちの教えとは、四福音書、使徒行伝、書簡、啓示録から成っています。すなわち、新約全体が使徒たちの教えです。わたしたちが教えることは何であれ、使徒たちの教えである新約にしたがっていなければなりません。もしそうであれば、わたしたちの教えもまた使徒たちの教えです。ところが、異議を唱える者たちは、使徒行

伝第 2 章 42 節で述べている使徒たちの教えは、主イエスが十二弟子たちに教え、将来の新しく救われる信者たちに教えるように命じられた四福音書だけを指すと言いました。これに対し、わたしは四福音書の主イエスの教えは使徒の教えの一部にすぎず、その教え全体ではないと返答したのです。ヨハネによる福音書第 16 章で、主イエスは弟子たちを教えていた時、彼らに言われました、「あなたがたに言うべき事がまだ多くあるが、あなたがたは今、それに耐えることができない。しかし実際の霊が来る時、それをあなたがたに明らかにするからである」(12-15 節)。これは、主にはペテロや他の者たちに教えることがたくさんあるが、まだその時が来ていないことを示しています。主は、さらに深い事柄を何人かの弟子たちに明らかにするために、その霊が来るのを待たなければなりません。では、だれに対して深い事柄は明らかにされたのでしょうか？ もちろん、それはおもに使徒パウロに明らかにされたに違いありません。コロサイ人への手紙第 1 章 25 節で、パウロは彼の務めとは、神の言を完成することであると言いました。神の計画、神のエコノミーは、おもにペテロに啓示されたものではありませんでした。それはおもに使徒パウロに啓示され、彼の十四の書簡に記録されています。

もし四福音書が使徒たちの教えであるなら、すべての書簡もまた使徒たちの教えであるはずで、これが聖書の正しい解釈です。そして、もしわたしたちが語る事が新約にしたがったものであれば、わたしたちの教えもわたしたちの教えではなく、使徒たちの教えであるのです。もしそれがわたしたち自身の教えであれば、それは使徒たちの教え以外の何かです。テモテへの第一の手紙第 1 章 3 節から 4 節で、パウロはテモテに、エペソにとどまっていて、ある人たちが神のエコノミーと異なる事を教えることがないように命じなさいと言いました。異議を唱える者たちが、務めの教えについてそれた事を言うのは、彼らの意図がまさにわたしの務めを放棄させること以外の何ものでもありません。

(9) リーダーシップについて

異議を唱える者たちはまた、リーダーシップの問題について幾つかの質問を提起しました。1986 年、わたしは一連のメッセージをしましたが、それらは彼らによって誤解され、誤用されました(参照、リビングストリームミニストリー出版、長老訓練、第 7 巻、主の動きのための一つ心)。彼らは、わたしが主の回復の指導者であると言おうとしている、と思ったようです。次に、1987 年の夏の訓練で、わたしは補足のメッセージを行ない、新約のリーダーシップとは、実は人ではなく、使徒たちの教えであると指摘しました(参照、リビングストリームミニストリー出版、新約エコノミーを実行するための神の定められた道、第 19 章)。真のリーダーシップとは、パウロ自身ではなく、パウロの教えであり、新約の教えです。今日、わたしたちの間で、新約の使徒たちの教えを教えている者の教えが導きなのです。主の回復のリーダーシップは、だれかの教えにしたがったものではなく、新約の教えである使徒たちの教えにしたがったものです。

今日、主の回復の中にいる聖徒たちは、わたしに従うべきではなく、もしわたしの教えが使徒たちの教えにしたがったものであるなら、わたしの教えに従うべきです。1934 年、ニー兄弟はその務めの中で多くの反対に遭いました。その時、わたしは彼に会いに行きました。わたしは彼にこう言いました、「ニー兄弟、初めてわたしたちが出会った時から、あなたとわたしとの間には個人的な愛情があったわけではありません。しかし、わたしは

あなたに絶対的に従いました。わたしには正しい道を歩んできたという確信があります。なぜなら、あなたは主の啓示を持っているからです。あなたがわたしたちに伝えた啓示は新約にしたがったものです。実際、わたしは個人的にあなたに従っているではありません。わたしは、あなたが解き放した啓示に従っているのです」。さらに、わたしは彼に言いました、「ニー兄弟、たとえあなたが今、主の回復の道を放棄したとしても、わたしはその中に居続けます」。

あなたがたは主の回復の中で一人の人に從っていると思っているのでしょうか？ 異議を唱える者たちの一人は、自分はこれまで一人の人に從ってきたと言って、徹底的に悔い改めました。彼はそのようにすることによって、神の御前に大きな罪を犯していたと言いました。わたしはあなたがたすべてにお聞きしますが、あなたは一人の人の言葉に耳を貸しているのですか？ 実際、あなたは一人の人が言うことに耳を貸しているのではなく、使徒たちの教えに耳を貸しているのです。わたしは主のために語り始めた時から、新約の原則にしたがった事しか語っていない、と確信をもって言うことができます。ですから、務めに従うことは間違った事ではなく、絶対的に正しい事です。

主の回復は、1922年から1952年まで、ちょうど三十年間にわたるニー兄弟の教えを通して、中国で起こされました。この三十年間、新約の教えを解き放った人は、彼のほかにだれもいませんでした。1950年、わたしは台湾に遣わされました。1952年、彼が投獄されたため、彼の教えを聞くことはできなくなりました。わたしは彼に置き換わろうと立ち上がったつもりはありません。わたしはただ労苦することしか知りませんでした。わたしは教えに次ぐ教えを解き放ちました。しかし、わたし一人で諸召会を教えようというつもりはありませんでした。わたしたちはアナハイムの集会所へと移った後、この国の指導的な同労者たちを集めて、執筆するための特別集会を持ちました。わたしはすべての同労者たちに何かを執筆するように励まし、彼らもわたしの勧めに従って、それぞれの地方に戻って執筆を始めました。最終的にわかったのは、直接彼らからはほんの少しの書き物しか出てきませんでした。彼らが書いたものは、ほとんどがわたしのメッセージのコピーでした。幾つかの地方では雑誌も出版しましたが、それらの出版物のメッセージのほとんどはわたしの教えのコピーで、中にはニー兄弟の教えを繰り返したものも幾らかありました。このような状況を踏まえて、わたしは1986年、わたしはすべての兄弟たちにこのような繰り返しをしないように勧め、彼らはみなそれに従いました。正直に言いますが、1950年から1990年の四十年間、召会を起こし、建造し、聖徒たちを養い、その他、さまざまな事を成すために有用であったのは、だれの教えだったのでしょうか？ もちろん、その基礎になっているのはニー兄弟の教えです。では、その基礎の上に建造を遂行したのは、だれの教えによったのでしょうか？

わたしは家に、台湾の最高の神学校で出版された一冊の本を持っています。その本は、人々に聖書を学ぶように奨励し、どのように聖書を学ぶかを教えています。その中には、1949年からの四十年間、中国のクリスチャンの間での、聖書の解釈は、「集会所の人 (Assembly hall people)」の教え、つまり主の回復の教えの範囲を超えるものはなかった、と言った短い言葉があります。もしわたしたちがニー兄弟とわたしの教えを取り除くなら、今日の召会はどこにあるのでしょうか？ このことから、わたしたちは務めを中傷する敵の策略を見ることができます。

(10) 同じ心・思いについて

わたしたちは互いに違いがありながら、同じ心・思いになることができるでしょうか？

それに対する答えは、「はい」です。わたしたちは違いをものともせず、同じ心・思いにならなければなりません。福音書も、使徒行伝も、同じ心・思いになるように教えています（マタイ 18:19、使徒 1:14、2:46、4:24、5:12、15:25、ローマ 15:6）。ある人たちは、同じ心・思いになるためには信者の間の違いをすべてなくさなければならないと言いますが、これはすべてのものを画一的にしてしまうだけです。

新約聖書の諸召会にも、多くの違いがありました。ローマ人への手紙第 14 章で、パウロは特定の日を尊ぶ人も、そうでない人も両方受け入れなければならない（1、5-6 節前半）と言います。彼はまた、教理的な概念や宗教的な実行がわたしたちと違う信者たちをも受け入れなければならないと言いました。なぜなら、神とキリストは彼らを受け入れておられるからです（14:3、15:7）。神とキリストが彼らを受け入れているのに、どうしてわたしたちは受け入れることができないのでしょうか？ パウロはまた、野菜しか食べない人がいれば、何でも食べる人もいる（ローマ 14:2-3）と言います。わたしたちは神とキリストが受け入れたように、彼らを受け入れなければなりません。信者を受け入れることで、パウロは非常に広く、寛大でした。彼は心の狭い人ではありませんでした。

二十五年以上も前のことですが、わたしたちの間に一人のユダヤ人の姉妹がいました。ある日、彼女は、豚肉料理を食べた時に使われた皿やフォークは、たとえ洗剤を使って洗っても、そのにおいがすると言いました。召会にはあらゆる種類の人たちがいます。わたしたちはみな救われましたが、多くの違いを持っています。足洗いを実行する者がおり、頭におおいをする者がいます。一度だけ浸すバプテスマを受ける人がおり、三度浸すバプテスマを受ける人がいます。わたしたちの間に、このようなさまざまな信者たちがいた場合、同じ心・思いになることができるのでしょうか？ わたしは、さまざまな違いを持つ信者たちが同じ心・思いになって集会するのを見るのが大好きです。それはすばらしい事です！

1963 年、ロサンゼルスに在る召会では、少なくとも四つの異なるグループが共に集会していました。その前年に、わたしはアメリカ合衆国における主の回復の第一回の特別集会を持ちました。その時、わたしは申命記第 8 章から、すべてを含むキリストについて語りました。この一連のメッセージは多くの人を魅了しました。これらのメッセージを聞いたある人たちから、今度は自分たちの所でぜひ特別集会を開いて欲しいという招待を受けました。最初の特別集会が 12 月 31 日に終了しましたが、わたしはその翌日にカリフォルニアのホイティアへ行き、おもにブラザレンの信者たちから成るグループの人たちに語りました。すると、今度は彼らからラスベガスにある別のグループの人たちにも語ってほしいと依頼されたのです。そのグループは単立の聖書教会でした。わたしは四度彼らを訪問しました。やがて、彼らは全員ロサンゼルスに移り、その地で召会に加わることを決めたのです。

このグループのほかに少なくとも三つのグループが、ロサンゼルスにやって来ました。ある日、彼らはみな一緒に集会することに同意しました。1963 年に、ロサンゼルスで集会した会場に、わたしは二つの標語を掲げました。一枚には、「合一対画一化」、もう一

枚には、「多様性を持った合一」と書きました。ロサンゼルスで集会を開始した当初の状況は、このようでした。わたしたちは多くの多様性を持っていましたが、また同時に合一を持っていたのです。

その後、わたしはニューヨークに行きました。わたしが留守の間、この標語は無用になっていました。集会中に一人の若い姉妹がタンバリンをたたき始め、ブラザレンから来た一人の兄弟がその姉妹にやめるように言ったそうです。わたしは、ニューヨークに滞在していた時、電話を受け取り、その出来事を知りました。ロサンゼルスに戻り、わたしはブラザレンのグループのその兄弟と話をしました。わたしは彼にタンバリンとピアノを比較するように言いました。すると、彼はピアノのほうが好きだと言いました。わたしは彼に、「兄弟よ、神の目には、この二つの楽器にどんな違いがありますか？」と言いました。彼は、神の目には、何の違いもないことを認めました。わたしはさらに続けて、「この二つの楽器が神の目に同じであるなら、それはわたしたちの目にも同じであるべきです」と言いました。その兄弟は、タンバリンをたたくことを受け入れることはできないと返答しました。そこでわたしは、「兄弟、タンバリンをたたくことを受け入れることができないなら、あなたは召会生活をすることはできません」と言ったのです。

召会生活には、合一と多様性がなければなりません。同じ心・思いになるとは、あらゆる違いを無くすことではありません。もしそうであるなら、この時代には決して同じ心・思いを持つことはできないでしょう。わたしたちは画一的になることを忘れて、合一を守る程度にまで訓練されなければならないのです。わたしたちは、多くの異なったものがあるのに何の不調和もないという集会を見ることを喜ぶべきです。

ロサンゼルスで集会を始めたばかりのころ、何人かの異言を語る人たちが集会にやって来たことがありました。彼らが集会の中で異言を語り始めた時、数人の兄弟たちはわたしがそれに対処するのを見ていました。やがて彼らが異言の解釈を始めると、兄弟たちはそれをやめさせるようにわたしに合図しました。しかし、わたしは小さな声で兄弟たちに、彼らのするがままにさせなさいと言いました。わたしたちは、そのような違いを受け入れることができます。

かなり前のことになりますが、数名の兄弟たちが主の回復の道を受け入れましたが、主の食卓にはあずかろうとしませんでした。この問題がわたしに託された時、わたしは彼らには何の問題もないと言いました。彼らが主の食卓にあずかるのが好きでも嫌いでも、彼らはやはり主によって受け入れられた者たちですから、わたしたちも彼らを受け入れなければなりません。彼らの地方にある召会は、かなり長い間、主の食卓を持たないことを実行していました。それにもかかわらず、その地方の聖徒たちは他の地方の聖徒たちと真に一であったのです。違いがあるにもかかわらず、同じ心・思いがありました。主の食卓を持たない兄弟姉妹も主の食卓の話を聞いて、次第に自分たちも実行したいと思うようになりました。現在では、彼らも定期的に主の食卓にあずかっています。これは、多様性を持った合一を守ることの例証です。

(11) 召会の立場について

召会の立場の定義のエキスとは、内側では、その霊の一を保ち、外側では、違いを受け入れて、自分が住んでいる地方の境界以外に、わたしたちを地方召会として分離するもの

をいっさい認めないことです。エペソ人への手紙第 4 章 3 節は言います、「平和の結合するきずなの中で、その霊の一を保つことを熱心に努めなさい」。その霊の一を保つのは内側の事ですが、違いは外側の事です。安息日を順守する兄弟と、主日に集会する兄弟がいても、それぞれの違いは外側の事です。わたしたちは、内側では、その霊の一を保ち、外側では、違いを受け入れなければなりません。これが召会の立場の本質です。

召会の立場は、自分が住んでいる地方の境界以外に、わたしたちを地方召会として分離するものをいっさい認めないことを含んでいます（啓 1:11）。バプテスマ、異言を語ること、滴礼、浸水礼、食事の嗜好などはどれも違いです。しかし、これらのどの違いによっても、わたしたちは分離すべきではありません。わたしたちが分かれるのは、ただ住んでいる地方によってです。もしわたしたちがアナハイムに住んでいるなら、ニューヨークにいる聖徒たちと定期的に集会を持つことはできません。これは不可能な事です。もしアナハイムにいるなら、ロサンゼルスにいる聖徒たちと集会を持つことは難しいです。わたしたちの地方が、自然にわたしたちを分離します。わたしたちは外側では、分離されていますが、内側では、依然として一です。わたしたちは、霊の中で、ニューヨークの聖徒とも、ロンドンの聖徒とも、台北の聖徒とも一です。

（12）務めによるすべての訓練を中止すべきである

異議を唱える者たちは、務めによるすべての訓練を中止するように要求しました。これは彼らの意見でしたが、わたしには負担があります。わたしたちの間で分裂をひき起こしている者たちは、わたしが訓練を使って、諸召会を管理しているとわたしを非難します。

これらの者たちの反逆は 1987 年 9 月に始まりましたが、その時、わたしは台北にいました。1987 年 12 月に、わたしが台北からアメリカに帰って間もなく、異議を唱える者たちの四人はわたしに会いに来ました。彼らはわたしに幾つかの要求を出し、「もしあなたがその要求に応じないなら、あなたの出版物とテープ類の販売を中止し、アナハイムに在る召会が率先します」と言って、わたしに警告しました。彼らのうちの一人は激しい口調で台北の訓練をばらばらに解体させるべきであると言いました。

繰り返しますが、彼らには意見がありますが、わたしには負担があります。あなたの意見によって他の人の負担を邪魔するのは正しくありません。訓練について祈れば祈るほど、ますますわたしには負担が与えられました。もし訓練がなくなったとしたら、回復の中の諸召会の状態はどうなることか考えてみてください。

1933 年に、わたしが初めて上海に行った時、ウォッチマン・ニー兄弟は訓練の必要性をわたしに話してくれました。わたしたちの多くは、絶えず彼の訓練の下にありました。やがて、彼は二回の大きな訓練を持ちました。1948 年に八十名以上の人が、約半年の間、彼のいる山に行き、彼から訓練を受けました。1949 年、彼は二回目の大きな訓練を持ちましたが、わたしもそれに参加しました。

使徒パウロは、三年間、エペソに滞在しました（使徒 20:31）。二年間、彼はツラノの講堂で主の言を語り、人々を教えました（19:9-10）。おそらくツラノという人は教師で、パウロは彼から彼の講堂を借り、そこを集会所として使いながら、主の言葉を宣べ伝え、教えていたのでしょう。わたしは、彼がその講堂で人々を教えていたのは、訓練のようなものだったと考えています。もちろん、エペソでは召会の集会が持たれていたことでしょう。

しかし、もしパウロが召会の集会以外に何もしていなかったなら、なぜ彼は講堂のような場所を必要としたのでしょうか？ また、もし聖徒たちを訓練する必要がなかったら、どうしてパウロはエペソに三年も滞在したのでしょうか？ わたしたちはおもにパウロの例に基づいて、訓練を持っています。わたしたちには願いのある若い聖徒たちを、主の言をもって訓練する負担があります。

(13) からだの一の性質と宗派に関して

異議を唱える者たちは、1987年に問題をひき起こした時、わたしが路線を変更したことが回復の性質に影響を与えたと主張しました。わたしは、福音を宣べ伝える古い方法から、人を訪問する聖書的な方法へと、方針を変えたことは認めます。わたしはまた人々に、一人の人が語り、その他の人はただ聞いているだけの集会から、コリント人への第一の手紙第14章の啓示にしたがって、すべての人が預言することができる集会に変えるように言いました。わたしはこれらの点で変更しましたが、そのことがからだの一の性質に影響を及ぼしたことはありません。

異議を唱える者たちは、1984年以前のわたしは正しかったが、それ以後のわたしは正しくないと言いました。彼らは、以前のわたしは命を分け与えていたのに、今は予算、人数、活動を与えていると言いました。1987年9月から現在に至るまで、わたしは多くのメッセージと特別集会を与えてきました。これらのメッセージは、予算、人数、活動に関するものではなく、神聖な真理の啓示と神聖な命の務めにあふれています。

反対者たちはまた、わたしたちが一の立場に関する教えを分裂的、分派的な方法で適用することによって、自分たちを他のクリスチャンたちから引き離していると言いました。しかし、実際には、わたしたちはすべてのクリスチャンを受け入れますが、彼らがその中で集会している分裂を受け入れることはできません。宗派は違いにとどまらず、分裂しています。ですから、わたしたちは彼らを受け入れることができないのです。ところが、わたしたちは聖徒と宗派を区別しています。宗派は一つのものであり、宗派にいる聖徒たちは別のものであります。わたしたちは宗派にいる聖徒たちを受け入れますし、カトリックにいる聖徒たちをも受け入れます。しかし、宗派の組織を受け入れることはできないのです。

わたしはこの事柄について何度も語りました。わたしの語ったことは印刷されています。これらの異議を唱える者たちは、わたしの話を聞き、わたしの本を読んでいながら、これらの問題をないがしろにしています。彼らは、「あなたがたは狭すぎる、自分たちだけが正しいと考え、他のクリスチャンを受け入れようとしない」と言います。これは公平な言い分ではありません。わたしたちはすべての主の子供たち、キリストにある真の信者たちを受け入れます。

(14) 使徒の存在、使徒の間の関係、彼らがどのように働いたかについて

異議を唱える者たちはまた、使徒の存在、使徒の間の関係、彼らがどのように働いたかについて問題を提起しました。使徒の存在は主の主権の按配の下にあるべき事であり、彼らの存在、関係、働きは、からだの中であって、有機的な機能にしたがって、卓越した秩序を保っているべきです。わたしが二兄弟と共に働いたのは、わたしの選択による事ではなく、神の主権の按配の下での事でした。わたしたちの間には、常に卓越した秩序があ

りました。わたしは、からだの有機的な機能にしたがって、彼の下にいるべきであるという全き認識を持ちました。

有機的な機能は、わたしたちの肉体によって例証することができます。腕を動かす時、肩、ひじ、手、指は、それぞれの機能にしたがって、卓越した秩序を保ちながら動きます。仮に、指が陰謀を企んで、他の肢体に対して、「どうしてわたしたち指は肩の下にいないなければならないんだろう？」と言ったとしましょう。これは、指を切り離して、肩の上に付けるべきであると言っているのと同じ事です。これでは指は死んでしまうでしょう。

わたしは働きを始めた当初から、意見を持たずに労苦することしか知りませんでした。わたしは、自分が、からだの有機的な機能にしたがって、ニー兄弟の下にいることを認識していました。異議を唱える者たちは、何かになろうと主張することによって、自分自身を切り離したのです。仮に、目がまつ毛の下にいたくないと言ったとしましょう。これは恐ろしい事です。そうなれば、まつ毛の役目も、神の創造の美しさも失われてしまうでしょう。キリストのからだには、その有機的な機能にしたがって、自然に一種の秩序が現されます。この機能は、いかなる組織的な按配によるものでもありません。むしろ、この機能は有機的なものです。使徒たちとすべての聖徒たちは、神の主権の按配にしたがって存在しています。

あなたは、自分のいる召会は問題だらけであると感じるかもしれませんが。あなたはどこか別の場所に移りたいと思います。しかし、あなたがどこへ行こうと問題があり、困難な状況があなたの分として与えられるのです。あなたが行くべき唯一の場所は、神の主権の按配の下です。自分の居場所を自分で選んだ人は必ず問題を持ちます。

(15) 代表権威対キリストの直接の頭首権

反対者たちはまた、代表権威に関する真理を拒絶し、自分たちはキリストの直接の頭首権の下にあると主張します。これはナンセンスです。行政府の中で治めている人はみな神の下にある代表権威者です(ローマ 13:1-7)。もし一国の民が、自分たちはだれからも支配されたくない、神だけが自分たちの支配者であると主張するなら、その国にはあらゆる混乱と無秩序がはびこるでしょう。あらゆる国には、必ず警察と裁判所による法の支配を持った行政府がなければなりません。代表権威は、神の頭首権と相反するものではありません。

わたしたちの肉体にも秩序があります。腕は手と指の代表権威と考えることができます。腕は頭と対比してはいません。地上にあるどの人類社会にも代表権威がいます。家族には両親がおり、両親は父と母から成っています。両者は同等ではありません。そしてまた、子供たちの間にも順序があります。わたしたちの内にある本性のようなものが、そのような順序があることを告げています。校長は学校の長です。教師は校長に従います。そして、生徒は教師に従います。良い生徒は自分たちの立場にとどまって、正しい代表権威に従います。

社会の至る所に代表権威がいます。代表権威を無くすと言うのは、ナンセンスです。道路の交通整理をする警察官は代表権威の一例です。警察官のゆえに、交通は整理され、車がスムーズに流れているために、交通事故や、それに伴う死亡事故が減少するのです。

聖書の神聖な啓示によれば、旧約であれ新約であれ、神のエコノミーには代表権威がい

ます。旧約では、それは神聖な託宣を民に教えたモーセや祭司たちであり、新約では、召会を顧みた長老たち（ テモテ 3:5 . 5:17 . ヘブル 13:17 ）や、諸召会を設立し、聖徒を教えた使徒たち（ コリント 10:8 . 13:10 . コリント 4:21 ）がそうです。ヘブル人への手紙第 13 章 17 節で、パウロは言いました、「あなたがたを導く人たちに従い、彼らに服しなさい」。

（16）諸召会の連盟

反対者たちは諸地方召会の自治を教え、わたしたちが諸召会の連盟を築こうとしていると言って、非難します。わたしたちは、召会は組織ではなく、有機体であることを見る必要があります。有機体の中では、自治や連盟を持つことはできません。わたしたちの肉体の各肢体は、有機的に一つに結合されています。それらは連盟を組織して一になっているわけではありません。

諸地方召会がすべて行政において分離していると言うのは、ある意味では正しいのですが、これは単に一つの面に限られた事です。召会には地方的な面があるだけでなく、宇宙的な面、宇宙的なからだの面もあります。両方とも必要です。わたしは宇宙的なからだを必要としますし、地方召会もまた必要とします。わたしが、すべての諸召会は同じであって一であるべきであると強調すれば、異議を唱える者たちはそのような一は連盟を意味するものであると言います。

ブラザレンは、この事で論争し合いました。G・H・ラングは地方召会の自治を教えて、J・N・ダービーによる連盟の教えを罪定めしました。しかしながら諸地方召会は独立して自治的になるべきではありません。なぜなら、それらはみな、手順を経た分与する三一の神の唯一無二の有機体であるからです。もしアナハイムに在る召会が、自分たちは地方召会であるが、他の諸召会から独立して、彼らには関心がないと宣言したなら、たちまちアナハイムに在る召会は地方分派となってしまうでしょう。どの地方召会も、からだの中にある他のすべての召会と一でなければなりません。

（17）現在の諸召会は古くなり、問題で満ちている

反対者たちはまた、現在の諸召会は古く、問題で満ちていると言いました。わたしたちは、新約聖書で述べられている諸召会にはみな問題があったことを見る必要があります。エルサレムに在る召会は若い召会でしたが、アナニヤとサツピラ（使徒 5:1-11）や、やもめへの日ごとの分配（6:1）の問題を持っていました。人は古くなくても、問題を持ち、病気になります。召会を顧みる長老たちは、絶えず問題を対処しなければなりません。あなたが生きていて、有機的な人である限り、日々病気になる可能性はあります。

新約の書簡は問題のある召会にあてて書かれました。もしこれらの諸召会に何の問題もなかったなら、今日、これらの新約の書簡は存在しなかったことでしょう。主に感謝します。初期の諸召会が問題を持っていたがゆえに、今日わたしたちに大きな助けをもたらす新約の書簡を持つことができたのです。コリント人への第一の手紙は十六の章から成る長い書簡です。この書簡は每章のように問題を取り扱っています。コリント人への第一の手紙第 11 章 34 節で、パウロは多くの問題を取り扱った後、こう言いました、「その他の事は、わたしが行った時に取り決めましょう」。ここで、パウロはこのように言っているか

のようです、「この書簡において、わたしは十一の問題に取り組んできましたが、その他にもまだ多くの問題があります。今ここでそれらを取り扱うことはできませんが、そちらに行った時には必ず取り扱います」。

1932年、北方中国ではまだ主の回復が始まったばかりのころですが、わたしは煙台に在る召会にいました。実のところ、当時のわたしたちには宗派を離れ、共に集会を持たなければならないという程度の認識しかありませんでした。わたしたちは回復の詩歌を持っておらず、どのように詩歌を選ぶのかもわかりませんでした。主の食卓にあずかる正しい方法や、主を高く賛美することも知りませんでした。その時に比べると、今日のわたしたちの実行、賛美、詩歌は、はるかに高いのです。また今日の召会も六十年前に比べても、三十年前と比べたとしても、はるかに高いのです。

(18) 実際対リー兄弟の教理と組織化された教え

異議を唱える者たちは、実際はリー兄弟の教理と組織化された教えに対比していると言いました。彼らの意見によれば、わたしは教え過ぎであると言います。彼らはわたしの教え、訓練、特別集会が諸召会を管理する手段であると言って、わたしを非難します。実際には、わたしの教えはだれをも管理はしませんが、わたしを含めて、わたしたちを規正します。

かつて一人の兄弟が、もし語り手がその人よりもさらに高い事柄を語るができなければ、彼は貧しい語り手であると言ったことがあります。わたしたちは自分よりも高い事柄を教え、宣べ伝えなければなりません。わたしたちの実際は啓示と釣り合うことは決してありません。パウロの実際は彼の啓示と釣り合っていたでしょうか？彼の経験は彼の啓示のレベルに達していたでしょうか？実際が教えと釣り合っていたのは、主イエスご自身だけです。彼以外に、この地上に自分の教えと完全に釣り合った実際の経験を持つことのできる人はいません。異議を唱える者たちはまた、わたしの教えが組織化されていると言います。これは間違いです。わたしは組織の中で何かを教えたことは決してありません。

(19) 聖徒たちの召会 民主政治

1988年、異議を唱える者たちは、召会は聖徒たちの召会であるから、わたしたちの間に民主政治があるべきであると主張しました。イスラエルの民と共にあった旧約においても、信者たちと共にあった新約においても、神の民の間の統治は民主政治（democracy）でもなければ、独裁政治（autocracy）でもありません。それは、神ご自身が統治する神政政治（theocracy）です。民主政治は、政治の世界では独裁政治より良いでしょうが、神の民の間では、いずれのやり方にもいかなる余地を与えるべきではありません。神の民にはただ神政政治があるだけです。セオス（theos、神）こそ、わたしたちの支配者であられます。彼は生きておられます。今や、彼はわたしたちの内側で、またわたしたちの間で、すべてを含む霊です。わたしたちは彼の言葉に耳を傾けることを学ばなければなりません。召会は神の支配に服従すべきです。

(20) 異議を唱える者たちが教えている上記の点は、

すべて主の回復に分裂をひき起こす教えの風となった

異議を唱える者たちが教えている上記の点は、すべて主の回復に分裂をひき起こす教えの風（エペソ 4:14）となりました。これらの教えの風は、以下のようにカリフォルニアのさまざまな地方で分裂をひき起こしています。ローズミード、アナハイム、ハンティングトンビーチ、サンディエゴ、南サンフランシスコ、カパーチノ、ロミータです。その他に、フロリダのフォートローダゲールでも分裂がありました。聖書によれば、いかなる分裂もそれを支持する根拠や、もっともな理由は見当たらず、また、それを正当化したり、擁護することはありません。

召会の容認できないものが三つあります。分裂、異端、不品行です。分裂はキリストのからだを駄目にします。異端はキリストのパーソンを辱め、キリストの働きに損害を与えます。不品行は、神によってキリストのからだの肢体とされた人々の人性を駄目にします。ローマ人への手紙第 14 章と第 15 章で、パウロはすべての信者を受け入れ、あらゆる違いを容認するようわたしたちに命じています。しかし、ローマ人への手紙第 16 章で、彼は言いました、「さて兄弟たちよ、わたしはあなたがたに勧めます。あなたがたが学んできた教えに反して、分裂やつまずきの原因を作る者たちを警戒し、また彼らから離れ去りなさい」（17 節）。分裂的な者について、パウロは非常にはっきりしていて厳格でした。分裂的な者に対する彼の教えもまた非常に率直なものでした。彼は聖徒たちに、分裂の原因を作る者たちから離れ去るように勧めました。

エペソ人への手紙第 4 章 14 節は言います、「それは、わたしたちがもはや幼子ではなく、波にもてあそばれたり、教えのあらゆる風によって吹き回されたりすることがないためです。この教えは、誤りの体系をもくろむこうかつな人の悪巧みです」。いかなる教えも、聖書的な人でさえも、信者たちをキリストと召会からそらすものは何であれ、神の中心的目的から運び去る教えの風です。教えの風によってひき起こされた波風を逃れる唯一の道は、命において成長することです。そして、命において成長するための安全な道は、わたしたちの保護であるキリストと召会をもって、正当な召会生活の中にとどまることです。（神の定められた道にしたがった召会生活の実行、26-71 ページ）

現在の反逆の発酵

からの抜粋：

現在の反逆を対処する道

現在の反逆を対処する道は、どのような分裂をも拒絶し（コリント 1:10）、どのような教えの風にも、どのような霊的死を広げることにも抵抗し（エペソ 4:14、テモテ 2:16-17）、伝染する者たちから自分を分離すること、すなわち隔離を実行することです。テトスへの手紙第 3 章 10 節は言います、「分裂を引き起こす者には、一、二度訓戒した後、退けなさい」。ローマ人への手紙第 16 章 17 節は言います、「さて兄弟たちよ、わたしはあなたがたに勧めます、あなたがたが学んできた教えに反して、分裂やつまずきの原因を作る者たちを警戒し、また彼らから離れ去りなさい」。ブラザレンは、そのような人々を断ち切ることを実行しました。わたしたちはこの実行には同意しませんが、伝染する者たちを隔離することを実行する必要があるという学課を学びました。

結びの言葉

異議を唱える者たちが彼らの出版物によってさえ、彼らの反逆をとて明らかに、公にしたので、わたしは主の回復における現在の反逆の発酵させるすべての出来事を、あなたがたに提示せざるを得ないと感じます。それは、あなたがたがすべての発酵の内在的な理由と原因について、はっきりするためです。召会の中で、多くのさまざまな人と、彼らのさまざまな認識と展望から成る団体として、問題はときには、長期にわたって避けられません。新約の教えによれば、そのような問題は、神聖な愛の中で、その霊の中の純粋で徹底的な交わりによって、絶えず赦すこと、すべてを顧みる寛容、自己を低く見るへりくだり、あわれみ深い同情、相互性の中の恵み深い助けをもって、正常に顧みられるべきです。これらの卓越したクリスチャンの美德ではなく、わたしたちが現在の反逆に見るのは、誇張された非難、ひどい陰口、理不尽な反対、狡猾にむしばむこと、悪らつな中傷、きたない悪口、非倫理的な匿名の手紙、ひどい攻撃、悪い意図の陰謀、狡猾な暗示、二枚舌の装い、でっち上げの虚偽、目に余るうそ、無謀に荒らすこと、收拾のつかない破壊と、想像を絶する憎悪、肉的なねたみ、無謀な復讐です。これらはキリストを享受することの実ではなく、聖徒たちを建造し召会を建造するのに良いものではありません。そのような事実を提示することさえ、わたしにとって喜ばしくありません。実に長い間、わたしはこれをすべきであるかどうかを主の御前でためらい、これについて兄弟たちと相談してきました。彼らはみな、知らない人たちを保護し、欺かれた人たちを回復し、揺れ動いて悩んでいる人たちを確立するため、歴史のために、そうするようにとわたしを励ましました。ですから、パウロが最終的に、このような事に関してテモテへの第二の手紙第 2 章 17 節から 18 節と第 4 章 14 節から 15 節で行なったこと、それにもまして、モーセが民数記で反逆の完全な記録を残しておいたことを考察した後、わたしはそうせざるを得ないと感じます。主がわたしたちすべてをあわれみ、彼の十分な恵みを与えてくださって、わたしたちがどのような代価を払ってでも、努力して彼のからだの一を保つようと、わたしは主を仰ぎます。わたしはまた、現在の騒動をひき起こした兄弟たちと、そのような非論理的で不当な行動に巻き込まれた人たちが、この事柄を主の御前で再考慮して、この質問に答えること

を期待します。それはキリストのからだの一に関心がある多くの聖徒たちの質問です：「あなたが従事していることは分裂的ではないですか、あるいはすでに分裂ではないですか？」。(現在の反逆の発酵)

主の回復における内在的な問題とその聖書的な治療法
からの抜粋：

分裂の状態に直面する道

真の一、正常な同じ心・思い、この二つの事柄の味わいに関するわたしたちの学びに基づいて、また異議を唱えることの非難に相對する幾つかの實行上の真理を挙げることに基づいて、わたしたちの間の現在の分裂的な状態に直面する道を考察することができます。この道は、わたしたちの現在の必要に応じる聖書的な治療法と考えられます。

キリストのからだとしての、また神の家と王国としての
召会に関する真理に完全な注意を払う

現在の分裂的な状態に直面するためには、キリストのからだとしての、また神の家と王国としての召会に関する真理に完全な注意を払う必要があります。テモテへの第一の手紙第 3 章 15 節は、召会は真理の柱また基礎であると告げています。ですから、わたしたちは聖徒たちを助けて、これらの事柄に関する完全な知識を持たせなければなりません。

どのような代価を払ってでも真理を守る

ヨハネの第二の手紙 1 節から 2 節と、ヨハネの第三の手紙 3 節から 4 節で、年長の使徒ヨハネは、彼の子供たちが真理を守っていることを知って幸いでした。

隔離することを実行する

わたしは、すべての召会が何かを行なって聖徒たちを助け、回復における真の状態を知らせなければならぬと真に感じます。聖徒たちは助けられて、「伝染性の病」が今わたしたちの間にあり、医学の分野でのように、病んでいる者たちを隔離しなければならないことを、認識しなければなりません。隔離するとは、「病んでいる」者たちを愛さないことを意味するのではなく、彼らを断ち切ることを意味するのでもありません。それは、わたしたちが何かを行なって、伝染する者たちとからだの他の人たちを保護することを意味します。

分裂的な者たち

ローマ人への手紙第 16 章 17 節とテトスへの手紙第 3 章 10 節によれば、わたしたちは分裂的な者たちを隔離することを実行する必要があります。ローマ人への手紙第 16 章 17 節は、分裂を作る者たちから離れ去るようにと命じています。彼らから離れ去るとは、彼らを隔離することを実行することです。テトスへの手紙第 3 章 10 節は、分裂を引き起こす(分派的、分裂的な)者には、一、二度訓戒した後、退けるべきであると告げています。そのような者を退けるとは、彼を隔離することを実行することです。

異端的な者たち

わたしたちはまた、異端的な者たち、キリストに関する教えを踏み越える者たちを隔離する必要があります(ヨハネ 7-11 節)。ヨハネの第二の手紙 10 節によれば、わたしたちはそのような人を家に入れるべきではなく、あいさつさえすべきではありません。これも彼らを隔離することです。

淫行を行なう者たち

それに加えて、コリント人への第一の手紙第 5 章 2 節、11 節から 13 節によれば、わたしたちはそのようなひどい罪の中に生きる淫行の者たちを、召会の交わりから取り除くことによって隔離する必要があります。

結びの言葉

分裂は信者たちをテストし良しと認める

コリント人への第一の手紙第 11 章 19 節は、良しと認められた人たちが明らかになるために、分裂は避けられないと言います。わたしたちが今経験している騒動や反逆は、常に会衆を変えます。そのような状況で、ある人たちは変えられ、ある人たちは良しと認められたことが明らかになります。

正しいか間違っているかの事柄ではなく、一を守るか守らないかの事柄である

大部分の人は、正しいか間違っているかの事柄に注意を払います。しかしながら、今日の状況では、正しいか間違っているかの事柄ではありません。それはわたしたちが分裂的であるかどうかの事柄です。

中立にとどまるのは建造のために良いのではなく、 キリストのからだの破壊のためである

中立であることはキリストのからだを建造するのではなく(コリント 13:8、10)、破壊します。中立であることは良い心から出て来るかもしれませんが、間違った方法です。

真理を守るために個人的な愛情に打ち勝つ必要がある

真理を守るためには、ナジル人の誓願をもって個人的な愛情に打ち勝つ必要があります。民数記第 6 章 6 節から 7 節で、ナジル人はどのような死によっても、血縁者の死によってさえ、汚染されてはならないと命じられました。ですから、わたしたちは「死にかけている」、あるいは死を広げているだれについても、注意深くなければなりません。もしわたしたちに近い人が、「死にかけており」、あるいは死を広げているのを認識するなら、自分を遠ざけなければなりません。そうでないと、もしそのような人に近いままであるなら、死の病原菌によって汚染されるでしょう。これはわたしたちの誓願を無効にし、わたしたちは自分の誓願を再び始めなければなりません(民 6:9-12)。ある場合、死の伝染を避けるためには、特にわたしたちがよく知っている人たちに対する個人的な愛情に打ち勝つ必要があります。レビ記第 10 章 6 節から 7 節、出エジプト記第 32 章 25 節から 29 節、申命

記第 33 章 8 節から 9 節はみな、わたしたちの祭司職の奉仕における個人的な愛情に打ち勝つ必要を強調しています。出エジプト記第 32 章 25 節から 29 節と申命記第 33 章 8 節から 9 節はいずれも、イスラエルの子たちが金の子牛を拜んで、主を極みまで怒らせたとき、モーセはすべてのレビ人に、彼らの親類と彼らに近い者たちを殺すことを求める言葉を語りました。彼らは従い、その結果、祭司職を得ました。ウリムとトンミムが彼らと共にあり、それは彼らが啓示を持ったことを意味します。彼らは神のパーソンに対する忠信さのゆえに、主の託宣のビジョンを得ました。神は彼の民が、彼以外のだれをも礼拝することを憎まれます。ですから、彼は忠信な民が、すべての偶像礼拝者を「殺す」ことを要求されます。これらの礼拝者の一人はわたしたちの父親であり、一人は姉妹であるかもしれません。主に対して忠信であるためには、わたしたちの個人的な愛情に打ち勝たなければなりません。

主の回復は命を通してであるだけでなく、それにもまして真理のものである

このような時、わたしたちは命の事柄だけでなく、真理の事柄を強調する必要があります (テモテ 3:15)。わたしたちはからだに関する真理と、召会の立場に関する真理を強調する必要があります。

キリストの裁きの座の光の中で歩く

わたしたちは自分が行なうことは何であれ、言うことは何であれ、主の再来によって彼の裁きの座で裁かれることを、覚えておく必要があります (コリント 4:1-5 . コリント 5:10)。パウロは強く非難されました。そのような状況の中で、彼はあえて、自分を裁かない、自分を正当化することもしない、むしろ、主の再来の時の主の裁きを待ち望むと言いました (コリント 4:3-5)。わたしたちはこのような光の中で歩かなければなりません。わたしたちが今日あるのは、単なる事柄ではありません。わたしたちが今日あることは何であれ、将来あることに影響するでしょう。

使徒パウロでさえ大いに非難されました。ですから、もし非難され、中傷され、傷つけられても、失望してはなりません。とがめのない良心を常に持つように、自分自身を訓練しなければなりません (使徒 24:16)。

召会生活の中で騒動をひき起こす問題

からの抜粋：

信者たちを受け入れ、分裂を造る者たちから離れ去ることによって
からだの生活を実行する

聖徒たちを受け入れることについて、ブラザレンの間で大きな議論がありました。こういうわけで、今日の閉鎖的ブラザレンと開放的ブラザレンがあるのです。閉鎖的ブラザレンも開放的ブラザレンも部分的には正しいのです。一方で、わたしたちは真のクリスチャンを受け入れることができ、また受け入れるべきですが、彼らの宗派を強めたり正当化したりすることはできません。これはわたしたちの態度でありましたし、そうあり続けてきて、今もなおそうです。わたしたちは、宗派にいるすべての愛すべき聖徒たちを愛すると言いますが、宗派を確証したり正当化したりすることはできません。宗派は間違っており、そこには多くの邪悪な事柄があります。あらゆる種類の聖職者階級制度は、主の目に邪悪な事柄です。聖職者階級を建て上げて、キリストのからだの肢体の機能を無にすることは、神の目に邪悪です。

わたしたちの態度は、からだを見ることにかかっています。唯一の治療法は、キリストのからだを見ることです。それはイエスかノーか、良いか悪いかの事柄ではありません。それはからだのものであるか、からだのものでないかどうかの事柄です。わたしたちは極みまでからだの意識を持たなければなりません。主が欲しておられるのはからだです。しかし今日、真にからだを顧慮する人は多くありません。

わたしたちはある人を主の食卓に受け入れるとき、からだを考慮しなければなりません。ローマ人への手紙第 14 章の原則によれば、わたしたちは主の子供たちをすべて受け入れますが、ローマ人への手紙第 16 章 17 節によれば、分裂を作る者たちを警戒し、彼らから離れ去らなければなりません。わたしたちはからだによって隔離されている分裂を作る者たちを、受け入れることはできません。さらに、だれが主の子供たちの間のらい病を識別する祭司として機能と資格を持っているかを、認識しなければなりません。再び、これはからだの生活を実行する事柄です。もしある地方召会が、からだに対して極みまで罪を得る者を受け入れるなら、その地方召会は明らかにからだと共に前進せず、からだと一ではありません。わたしたちはからだを顧慮しなければなりません。

ある意味で、地方召会はある程度まで、実行上の事務的な事柄でのみ自治的であると言うことができます。ある地方召会が土地を買って集会所を建てるべきか、それとも集会所を借りるべきかどうかは、彼らの識別にしがっています。しかし回復の中で問題をひき起こし、今もなお問題をひき起こしている人を受け入れることは、からだと大いに関係があります。わたしたちが正しく振る舞うなら、からだの中では良いのです。しかしもし新約によって罪定めされていることを犯すなら、からだは何かを言う権利を持っています。もしある地方召会で、彼らの間に分裂を作る者がいて、彼らがそれを対処していないなら、からだは必ずそれをチェックします。もしそのような者を対処しないなら、彼らは間違っており、からだに対して罪を得ています。

からだを認識することは正常な主の回復です。わたしたちが回復のためであるなら、回復とは何であるかを認識する必要があります。主は失われたキリストのからだを回復し、

無視されたキリストのからだの一を回復することを願っておられます。これが主の回復です。

わたしたちの天然の関係をわきへやり、からだの真理を実行する

わたしたちはローマ人への手紙第 16 章 17 節の真理を実行するとき、すなわち、分裂を作る者から離れ去るときが来ると、すべての天然の関係をわきに置く必要があります。もしわたしたちの親類が分裂を作ったり罪の中に生きていたりするなら、彼に主の食卓にあずからせることは間違っています。もしある兄弟の父親がめかけと一緒に生活しているなら、どうでしょうか？ 彼は、「どうして自分の父親を拒絶することができるか？」と言うかもしれません。確かに彼は父親を尊重し敬う必要がなおありますが、この家族の規定を召会生活の中に持ち込むことはできません。彼はキリストのからだを顧慮することによって、なおも真理を実行しなければなりません。

使徒行伝は、バルナバが彼のいとこマルコ（コロサイ 4:10）との天然の関係のゆえに、間違いを犯したことを告げています。彼は自分のいとこを連れて行きたかったのですが、パウロはこれに同意しませんでした（使徒 15:35-39）。バルナバは間違っていました。彼はパウロと一緒に行くべきでした。使徒行伝第 15 章でバルナバがパウロから離れた後、彼の名はもはや神の行動の記録に述べられていません。

わたしたちが過去、ある人からどれほど多くの助けを受けたとしても、もし彼がからだに対して罪を得ることを行なうなら、わたしたちは真理を実行しなければなりません。わたしたちはからだを認識し、からだに信頼しなければなりません。カリフォルニアにある諸召会が公開の手紙を書いたのは、この地上の諸召会に、ある者たちがカリフォルニアで行なった打撃と被った損失を知らせるという負担を感じ、責任を負ったからです。この公開の手紙で、彼らはこれらの者たちを隔離する決定をしたと言いました。わたしたちは諸召会に聞き従い、その状況を個人的に観察することを顧みるべきでしょうか？ もし多くの召会の通知をわきに置き、自分で状況を調査しに行くなら、これはからだに対して罪を得ることです。わたしたちはからだを尊重するのでしょうか、それとも自分を尊重するのでしょうか？

それはだれかが正しいか間違っているかの事柄ではありません。彼は正しいかもしれませんが、からだに対して罪を得ました。わたしたちはからだを見る必要があります。主が欲しておられるのはからだであって、一組の救われた魂ではありません。魂を獲得することは正しく、魂を獲得することは良いのですが、魂を獲得することは、魂を獲得することのためであってはなりません。主が魂を欲しておられるのは、キリストのからだの建造のためです。わたしたちはからだを見なければなりません。（召会生活の中で騒動をひき起こす問題）

同労者、長老、主を愛する者、主を追い求める者に対する愛の言葉
からの抜粋：

第3章アウトライン：

四つの消極的な要因に注意する

前回のメッセージに関する結論の言葉

1. わたしたちは、わたしたちの父なる神の愛し救す心を持たなければなりません。
2. わたしたちはまた、人を得る目標をもって、わたしたちの救い主キリストの牧し捜す霊を持たなければなりません。
3. わたしたちは、この二つの事柄を覚えて、実行上それらを認識する必要があります。

愛の言葉

以下のことに注意する：

A. 野心：

1. リーダーとなる。
2. 自分の働き場所、地区をさえ得る。
3. 人を魅惑して自分の私的な同労者にする。

B. 高ぶり：

1. 自分の霊的な能力をひそかに誇る。
2. 自分を高く上げ、人をさげすむ。
3. 自分は他の人以上であると思いつがる　ローマ 12:3。

C. 自己を義とし、人の失敗や欠点を暴露する：

1. 自分を義として自分の成功や功績を良く言う。
2. 人の失敗や欠点を暴露して罪定めする。

D. キリストの死に同形化されない：

1. 絶対的に自己を否んで十字架を負うことをしない。
2. 常に天然の人を十字架につけることをしない。
3. 生まれながらの性情を死に渡さない。(同労者、長老、主を愛する者、主を追い求める者に対する愛の言葉)

第4章アウトライン：

以下にある他のことで正しくある

以下にある他のことで正しくある：

A. あなたが高く評価し、引き付けられているどの同労者にも従うことで、注意しなさい：

1. 彼は、主を愛し、主のために生きて、自己、天然の命、好み、野心を放棄する人であるべきです。
2. 彼は、聖書全体の完全な啓示を正しく保ち、それを曲解したり変形させたりしない人でなければなりません。
3. 彼は、地方召会の唯一の立場を取ることによって、その霊の一、宇宙的なからだ

の一を保つことを熱心に努める人でなければなりません。

B . 聖書にしたがった神聖な啓示を受け入れることで、強く識別しなさい :

- 1 . 神聖な啓示を受け入れることは、以下のことによって支配されなければなりません :
 - a . 基本的な原則としての神の永遠のエコノミー。
 - b . 神の永遠のエコノミーの中心性と普遍性としてのキリスト。
 - c . 手順を経て究極的に完成された三一の神の神聖な目標としての、新エルサレムを究極的に完成するキリストのからだ。
- 2 . 神聖な真理の適用は、以下のことを避けなければなりません :
 - a . 聖別の三つの区分、ダビデの子孫としてのキリストが神の長子と定められること、「わたしはキリストにつく」という事実の承認など、どのような基本的な真理も、それを高く上げることは、キリストと、彼のからだを分けることになる (コリント 1:11-13 前半) 。
 - b . どのような付随的な真理をも無視したり、それらのどれをも強調したりすることは、分裂の方向に導き、キリストのからだを分けてしまう。(同労者、長老、主を愛する者、主を追い求める者に対する愛の言葉)